

カスパール(去る)。

ゴロ。 わしはわしの行爲を、一つの石のやうに、山上めがけてころがして行くのだ。その行爲がしまひに、ころがり落ちて、わしをおし潰すなら、むしろ本望だ!

カタリーナ。 まあ安心してゐなされ! そなたが抜目なくやりさへすれば、萬事うまく運びませうに!

ゴロ。 何がなほうまく運ぶといふのだ? わしはあの女の箱をはぎ落とさうとしたのだ。それは、わしをふたゝび高めるために、わしにのこつてゐたつた一つの路だつたのだ。しかし彼女は、かの寶石のやうに、打撃を加へるたびごとに、彼女を淨化するところの火花によつて、自分の仕返しをしたのだ。そんな譯でわしが、これまでのあらゆるわしの行爲によつて到達し得たのは、わし自身が神の前に、彼女に對して不相應な人間であると言はね

ばならぬといふこと、もう一つは、わしが、お前は悪漢であるぞ、またお前がどの位の悪漢であるかを知らしめる爲にばかり、この女はお前に拒まれた、しかも見せつけられたのだ、といふ事だけだ。今やおれは牢塔にくだりゆき、彼女の爲に牢の扉を押しひらき、そして牛の頭とともに、おれを飢餓の塔の中に閉ぢこめしめねばならないのであらう。それだのにおれは、ひらめく白刃を以て彼女の前にあらはれ出で、痛烈なる嘲弄をふくめて、「奥方、これば、あなたがあなたの魂をのぞかした方が送られたのだ。あの方は今やあなたに、どんなに堅くあなたを信頼してゐられるかを、お示しになるのだ!」といつてやりたくてならないのだ。(去る)。

第三場

ストラスブルク

ジークフリートの旅舎。夜おそく。ジークフリートの寢室のうしろ。若侍、胃をみがく。

若侍。 いま／＼しい！ もう明日、出發か！ 昨日ならよかつたんだがな！
しかし今日は——寺院てらでみうけた娘は堪らなく可愛い奴だ。いや、こんな事を言つて、殿様にきこえないかな？ (寢室の方に耳を叩いたむける)大丈夫！ 寢て居られるわい！ なぜまたおれは、こんなに恥づかしがるのだ？ 出征するものは、娘ッ子に目をくれてはならないなんて法は、ない譯だ！ あの娘の居所が、分かりさへすりや、いゝがなあ。さうなりや、殿もおれの爲に、明日こゝを立つとき、あの娘の窓のそばを通り過ぎねばならぬだらう。おれはおれの馬を荒れさせる、あの娘が窓から顔を出す、おれが挨拶をする、あの娘は顔を眞赤にする——かういふ段取になるんだがな。いま／＼しい！ 今日おれは間がわるく古い羽はねつき帽をかぶつてゐた。それでおれに非常によく似合う、この胃をかぶつたところは、もうあの娘に見せることも出来ないのか。恐れ

多い事だが殿が、出發をのばされるやうに、前よりも御病氣が重くなればい
いがなあ！ (胃を置きも一つの手に取る。)こんどは、殿のだ。なに、一寸やつて置けばい
んだ。殿は何事にも無頓着になられたんだからな。

第四場

ゴロー、乗馬用の外套をまとひ、拍車をつけて入る来る。

ゴロー。 おい、若侍！

若侍。 こんなに遅く？

ジークフリート(内側に)。 だれぢや？

若侍(ジークフリートの寢室に入る)。

ゴロー。 さあ、大事が迫つた！ 殿はわしをおそらく斬り倒すかもしれぬぞ！
さうなつたら、わしは斷末魔の息を以て、大逆の件を殿にうち明けよう！

第五場

ジークフリート(寢どこのから出て來た)。おゝ、ゴローか？　こんな夜更けに、何うしてまた？　それにまるで墓場からでも出て來たやうに、眞青に面やつれしてゐるではないか？

ゴロー。　いッそ、墓場へ這入らうとしてゐるやうに、と有仰つて下さい！　私は非常に心配してゐるのです——私の口がたつた一口いふや否や、私の眼があなたをすぐに見るであらうやうに、あなたが私においてあなた自身を御覽になりはしないかと。

ジークフリート。　わしの妻は死んでるのだ！　「否！」とお前は言はないな？　わしにもう何も言つて呉れるな、さうでなくばこの「否！」を言つて呉れ！

ゴロー。　奥方は生きてゐられるのです！

ジークフリート。　奥が生きてゐる？　それならば、事情はともあれ、前以ていつておくが、わしは大して弱りはしないぞ。

ゴロー。　あの方のお子様も生きて居られます！

ジークフリート。　なに、わしのお子様

ゴロー。　さう申し上げたのではありません！

ジークフリート。　何ぢやと！

ゴロー(おこそい)。　殿！　私は恐ろしい知らせによつて、あなたのお心をうち割り、しかも同時にその割れ目をば、ふんわりとしたうまい言葉によつて醫さうとするやうな、器用な眞似は出來ないので。それ故に、人々が人殺しの叫びを世間の睡眠をつき破りつゝ叫ぶやうに、或は都に大火が起こつたとき、人々が窓をたゝいて警告するやうな事はせず、たゞちに鐘の紐をひつばるやうに、さういふやうに私は呼び上げます——あなたは館にかへられて

も、そこではあなたの考へ得ない事が起こつてゐるのです、と。貞操な妻の死を夫に告げ知らず事は、いかに辛いことであらうとも、私が今あなたに御知らせしなければならぬ事に比べれば、それは何でもない事でございませぬ。私はあなたの奥方が、僕のドラゴーンと密通してゐるのをみつけたのです。そして奥方が生んだ男の子は、つい三日前にこの世の光を見たのです。あなたは御自身、それが正當な時か何うかを、最もよく御存じな筈です。

ジークフリート(訝えぬ聲で、ゆ)。——二——十月、わしは留守にしてをた！——そして今やつと生れたのか？ わしが出かける時に、奥は話した事だが——今やつと生れたのか？ (笑ひなが) わしはもう床についてゐたんだ！何を思ひ悩むことがあらうぞ！ それはあらゆる空想の中の、最も愚かな空想だ、そして最も罪深き空想だ。氣をつけるがいゝ！ 氣をつけるがいゝ！ うっかりしてゐると、百合が黒いと、思はれて来るぞ。 (眼を閉) まともな、狂

つてゐもしない魂が、一體まゝ何處から、眠つてゐる間に、自分に抗議し、自分を苦める材料を取つて来るのであらうか！ われ／＼はほんとに塔の上に立つて、自分の下のしッかりした大地をながめながら、今にも落ちはしないかといふ眩暈を感じるものだ。 (ゴロロをちつ) お前はまたそこにゐるのか？ それならお前は、わしに地獄をおくる幽霊なんだな。そしてお前が、わしにとつてなつかしい顔付をもつてゐないなら、わしは劍を以てお前につき寄るぞ——亡靈をきづつけることの出来ないといふ事を、わしはしつてはゐるが。

ゴロロ(行かうとするか、のやうに)。私は明朝、参ります。

ジークフリート。そんならわしは目覺めてゐるんだ。それでそこにゐるのはほんとにお前なのか？

ゴロロ。はい！ 然しあなたがそれをお信じにならないといふことは、私には意外でも何でもありません。あなたの奥方のやうな女性をば、罪人と考

へることは、生きてる人間を幽霊と考へるよりも、すつとやさしいことです
からな。

ジークフリート(キツとたちあ)。 勿論だ！ 勿論だ！ わしは一人の夫だ、そして夫として忠實な妻に對する権利をもつてるのだ！ そしてわしがこのわしの権利と奥の義務とを、一つの感情にまとめるときは、自由にかつ矜持をもつてわしはかう言ひたい——そんなことを言つたものは、うそを言つたのだとな。

ゴロ。 私はおそらくすでに一遍、うそをつきました。

ジークフリート。 ウム、それだ！ お前を疑ふべき権利を、わしは持つてゐない。奥を疑ふべき勇氣を、わしは持つてゐない。二つの秤の皿におけるが如く、わしは自分のものと稱しえた最高の財たかひが、等しい高さに浮かびながら、暗闘をやつてるのを見るやうだ。わしは、どちらにわしの重りを置くべ

きかを知らないのだ。(間)しかし！ わしは分かる！ わしはわしの心臓に問ひはしない。それが悲哀かなしみのあまり破裂したら、それはその義務をつくしたまでなんだ。わしは男として男に對してゐるのだ。わしはたゞわしの同性を保證することが出来る、あの女の性を保證することは出来ない。一人の女に起こりうることを、だれが探り得たらうか！ しかし一人の男がなし得ることを、胸の中の豫感がわしに告げて呉れる。そしてそれは今、千の舌をもつて「否！」といふのだ。さてしかし友よ、御願ひだ、わしを狂氣にしないやうにして呉れ。そして起こつたことがいかにして起こりえたかを、わしに明かにして呉れ。たしか、お前はさつきその男の名を——しかしそんな事はあり得るものではない！ わしの聞きまちがひだつたんだ！ 屹度かうだつたんだ——一人の歌手うたひて、それも金髪の歌手が、わが静かな城にやつて來たのだ。彼は歌つた——おそらくわしのことを歌つたんだ！ そして奥は甘美あまい陶醉

において、わしの記憶をやさしく新たにしておいて呉れた口をば、わし自身の口と間違へた、そして彼に接吻したんだ——やはり、奥がわしにまで運んだ愛が、新しい燃焼にまでの火花を興へた譯なんだ。さういふ事だつたのだらう？
屈辱はわしにとつてはやはり同じことなんだ。しかしそれは奥には當らないのだ。

ゴロ。 そんな歌手が来たならば、私は當然の處置として門を閉ざしたでありません。あなたの聞きまちがひではなかつたのです。それは歌手ではなく、ドラゴードだつたのです！

ジークフリート。 金の如く信實な男よ！ 今わしはお前に對して、すべてはお前が言つたとほりであると、誓ふことが出来る。ドラゴードのやうな男に、「嘘」のうはさの落ちるわけはない——たとへそれが狂人の頭から出て來ようともな。心情といふものは狡猾な、するいものだ！ わしは報償を要求せず

にはゐられなくなつた！ さうだ、さうだ！ たゞそのためにわしは身分のちがつた僕からではなく、たゞ奥からのみ報償を要求することが出来るのだ。さあ、友よ、もつとくわしいことをきかせて呉れ。そしてわしを面白がらせてくれ！ お前は屹度ドラゴードをつれて參つたであらう。彼を呼んでくれ！ わしは、彼が馬鹿話を旨く話して呉れるなら、彼のあるまじい振舞をも許してやるであらう。神様の失敗をわしはひと晩中、少し笑つてみたいのだ。六日目までは神は名匠であつたのだ。その神が何うしてしまひにもうこんな拙い技匠となつたのか、何うもわしには分からないのだ。それで、ドラゴードは何うしたんだ？

ゴロ。 ドラゴードはカスパーが刺し殺して了ひました。しかしハンスは此處に居ります。お氣に召しますなら、あの男に御尋ね下さい！

ジークフリート。 馬丁の口から、屈辱の封印をして貰へといふのか？ いや、

ゴロー、そんな事は断じて出来ない！

ゴロー。 お許し下さい。あなたの心臓に矢を矢つぎばやに射込むことは、わしには辛いのでございます。

ジークフリート。 いや、それをやつて呉れ！ わしはそれで死にはしない。たゞ即刻に、手短かに、やつて呉れ。(若侍)わしに服をきせてくれ！ それからわしを案内してくれ！ お前は、あの女がどこに住んでるか知つてる筈だ。

若侍。 そりやだれの事でございますか？

ジークフリート。 わしの傷の看病をしてくれた老婆はあさんさ。心配するな！ わしは、あの女があんな事をしたからといって、あいつを殺しはしないからな。

ゴロー。 あなたは何を考へてゐらしやるのですか？

ジークフリート。 わし自身の眼をもつてわしは奇蹟を見たいと思ふのだ！

(彼に服をきせる若侍に) わしの剣を！ それを忘れてはならぬぞ！

ゴロー(ひとり)。 殿はマルガレータのところへ行かうとしてゐるのだな！

何うも不思議な話だな！ 悪魔は何てするどい眼光をもつてゐるのだらう！ 彼女はわしにその事を前に話したことがある。そしてもうその準備をしてゐるのだからな。

ジークフリート。 ゴロー、それで？

ゴロー。 あなたの御出征の後、奥方がドラゴーに不思議にも御目をかけられてるといふことが、人々の目についたのです。奥方が供養に行かれるときに——ドラゴーは奥方のお供をいたしました。奥方は、寢間からでも、私の乳母をも御呼びなされず、また侍女のだけかれをも御呼びなされず、いつもあの男をお呼びになつたのです。尤も私はこの事を、たゞ人の話して聞いただけで、自分でそれを見たことはないのです。

ジークフリート。 そりやさうであらうとも！ 猜疑の念などのちつともない

そちだからな!

ゴロ。もとより終ひには、城中のさゝやきも、たちの悪るい感ぐりとなり、さまざまの大それたかげ口なども、わたくしの耳にはいりはしました。そこで私も真面目になつて注意ははらひました。しかし——私は何も見つけ出したことはありません。

ジークフリート(胃をかぶりながら)。何ごとも?

ゴロ。奥方が、ドラゴーがお室にゐるときに、二三度扉を閉ぢてゐてゐらしたことも、殆ど私の眼に止らなかつた位です。

ジークフリート。お前はほんのお坊ちやんだつたからな!

ゴロ。ある朝乳母がわたくしに、握手のてんまつを話してきかせました。

ジークフリート。えゝゝ!

ゴロ。そこで私は、何とかしてあの男をこゝから出すに限る、と考へました。私は彼を私のところへ呼びつけました。「ドラゴーよ——かう私はもちかけました、「山の城の管理人が病氣になつたのだ。それでわたしには、お前の外には信用出来る男はゐないのだ。さういふ譯だから何うかもう今日中に出發して、あの男の役目をひきうけてくれ」——するとあの男はぶっさらばうに、「あの方はその事を御存じですか?」ときくのです。「だれだ?」と私が問ひ返しますと、「だれですつて? あの方です、奥方です!」——「いゝや」と私は答へました——するとあの男の言ひ草はかうです、「そんならあの方が私を御行かせになるか、まづ御尋ねになつて下さい!」私はさういたしたので、すると奥方は私の顎を御つかまへになつて——

ジークフリート。ナニ、顎を?

ゴロ。そしてかう言はれるのです、「わたしの息子さん、お前のやれる人

は外にもあつた。何ならお前自身ゆくが、いゝではないか。ドラゴンは私は手ばなしません。」

ジークフリート。 何用あつて？ (胃をまぶかく押しつける。)

ゴロ。 私もさう御尋ねしました。すると奥方は、返答に窮する人間が腹を立てるやうに、非常に御立腹になつたのです。それでそれなりになつてゐたのです。

ジークフリート。 わしは出征してをつた。戦争ではいつ死に果てるか、分からぬものだ。そして死んだものは、辯明を要求することは出来ない。何うだ、奥もそんな事を考へたのぢやないか？

ゴロ。 奥方が何を考へられたか、私は一向存じません。ある晩方の事です——御家來達が食事についてるときでした——ドラゴンの姿が食卓に見えないので、立つて氣を揉んでゐたのですが——突然、乳母が眞青な顔をして

眼を据えたまま、扉から這入つて来て私に、「ドラゴンのやつが、あの方ともねを！」といふのです。私はそれをすぐに本當だとは思ひましたが、それでも彼女の方につばを吐きかけました。彼女はしかし、そのために眞赤になつておこりながら、食卓のところへ行つて、みんなにその事を大聲でいつて了つたのです。一同、とび上がりました。バルタザールとハンスは蠟燭をつかみました。カスパールはドラゴンを殺して了うと誓言しました。私はみんなに迫られて眞先に——

ジークフリート (額に手をやつて。) もういゝ、もう澤山だ！ さあ、來い、若侍！

くわしいことは途中でできくとしよう！ わしにはそれが分かるであらう！ 何故またわしは、すつと前から、眞理の淨玻璃をのぞき込むことが出来なかつたのだらう！ わしはもうそれを豫感してゐたのであらうか？ そなたは目のあたり視たのだね、さうぢやないか？ カスパールとハンス、バルタザ

「ルヤコンラート、それからまだだれが見たんだ？ 全世界の人達よ、お前達はみて了つたのだな——」

ゴロ。床のかげにかくれてゐるドラゴと着物をぬがれたあの方とを！

ジークフリート(怒り猛りて)。そんなに多くの人達がそれを見たのは、そなたに取つてのもつけの幸ひだつた！ そなたがひとりであつたであらうなら——わしが屈辱の鏡をば、わしなら、彼等よりもつとより早く、こなぐくに打ち砕くであらうに！

ゴロ(胸をおしひらいて、ジークフリートの剣を指す)。

ジークフリート(彼に手をさし延べて)。静かに！ 静かに！ もう何も言つて呉れるな！

わしはより多くを知らねばならない——さうだ、すべてを！ といふのは、わしはほんとに、すべてを行はねばならないからだ！ さうだ、さうだ！

しかし、そなたの口からは、一語もきゝたくはない。わしがその前で顔を赤

らめるにも及ばない、沈黙せる水晶が、わしにそれをソツときかせなければならぬ。さあ、来い！ 来い！ (若侍に)お前は、わしをあそこへ連れて参つたなら、すぐにひき戻して、わしのアラビヤ馬に鞍を置くのだぞ！ (退場)

ゴロ。殿は立派な男ぢや——あの女が立派な女であるやうに。ところがおれは！ (ジークフリートのあとからついて行く)

第六場

真夜中。マルガレータの室——奇妙に裝飾され、魔法の道具が一杯ある。大きな、圓い水晶の鏡、それは蔽はれてある。彼女は一つの卓子によつて、眠つてゐる。しばらくして目覺める。

マルガレータ。わしは夢で一人の子を夢みた、きれいな子ぢや、齒は白く、頬は白くまるくとして、眼は——いや、それをわしはよく見なかつた。二つの大きな、涙がその中であつた。その子供は叫んだ——「坊やお前のた

めに、天使となるやうに定められてゐた。お前は坊を小川の中へ投げ込んだ！」「天使だつて、まあ、粉屋の下男がつくつた天使だらう！」「つべたいお魚が、坊やの肉をみんな喰べて了つた！」「坊や、魚だとわしはお前のかたきを取ることも出来ないね——わしは魚といふものを食べないのぞな——」そして小川が乾上つたら、瘦せた狼がやつて来て、わたしの骨を噛んちやつたよ！」「——噛ませて置くがい、子供よ——したが、お前は何といふ名だつたの？　なんの、わしはお前には名前を與へなかつたの！　馬鹿な夢さ！　子供よ、お前も一人の子供のためにたのむのかね？　それなら無益な事だわ！　わしは今に世間の人にかう言はれたうはないからの——わしは他人の肉と血には情け深うて、それだのにお前には、とな——」扉のところではガチャ／＼いつてるの！　さては御出でなされたかの、伯爵どの？　悪魔はもう来てをりますぞ！　(立ち上つて、身をゆする。) わしは何うも氣分がすぐれぬ！

丁度いま、こんな事を思ひついたので——わしが娘ッ子を溺らせなかつたなら、そしてあの子が、いま夢でみたやうに縹致よしであつたなら、今ごろはおそらく求婚者が扉をたたくであらう、夜中に金をもつて来るやうな求婚者が。まあ、死んだ人間はそつとしておく事だ。彼等はよく休んでゐるのだからの。さて、まあ、だれが彼等を妨げるのぢや？　彼等はやつぱりわしの心をかき亂すわい！

ジークフリート(扉の外を摸索す。)　こら、こら、開けてくれ——

マルガレータ(扉をひらく。)　だれぢやな？　おや、伯爵どの——
(不思議がるやうな様子をして。)　こんなに遅く？

ジークフリート、ゴローと共に入り来る。

マルガレータ(ゴローに、密に、内。)　ごたがひに知らぬ顔にして置くのかの？　そなたはわしをこれまで見た事はなかつたのだ！　それを忘れなさんな！　この方

は、わしがこの方の城に居つたことは、些とも知つてをられぬのぢや！

ジークフリート。　ゴロー、そちに少し語りたいことがあるが――

ゴロー。　何でございますか、殿？

ジークフリート。　たしかに、わたしはお前達を信用してゐる。椅子をもつて来て呉れ！　わたしはたゞ一寸の間、こゝで休まうと思ふのだ――わしがたつた一度、わしの妻が僕の腕しんべに抱かれてゐるのを考へることが出来たら、こゝをすぐたち去るのだ。わたしには、ドラゴが跪かうとしてゐるかのやうに、彼女の前に立つてる姿が見えるのだ、そして彼女が天から惨めな人間を見下ろすやうな透きとほつた眼付で、見下ろしてゐるのが見えるのだ。(椅子を以つて来たマルガレに)置いてくれ！　構はんで呉れ！　わしが座らうと思つてるなどと、だれがお前に言つたのか？　わたしはお前のところに、ながくは止つてゐられないのだ！　何うだ、ゴロー、いつたい神は、いかなる人間にも了解出来ない

ことを、起こらせるやうな権利をもつてゐるのであらうか？　あゝ！　あゝ！　しかしそれでも！　わしがそれを了解出来ないなら、それは、彼女が偽善の名人であり、あるまじき邪悪よこしまの名人であつたといふことより外の、何を示してゐるであらうか？　ドラゴのやつめ！　何だ！　あれは、いくら彼女に氣はあつたとしても、彼女に惚れぬいて接近するほどの勇氣のない男なんだ――その男を、彼女は、相圖なり、もの言はぬ眼付だけではなく、いや、公然おほつからな言葉で以て、或は恐らく、そのうへ命令づくで、彼女の胸におびき寄せたのか。そしてあの男は、陶醉においてすら死刑執行人を忘れえないところの、いやらしい兇行者の心配を以て、あらゆる彼女の魅力をたのしみつゝ汚しをつたのか。わしの腕に抱かれて彼女はまつたく死んでるやうであつた――わしが城をたち出たときの事だが――身内の悪寒が彼女の身をゆすぶつた。彼女は、二つの翼をばこの世の塵をふせぐかのやうに動かしてゐる天使

と見えた———こんな女にいつたい、大それた真似が出来るのであらうか？　だがしかし、何故またわしはこんな事をそなたに尋ねるのであらう！　そなたは男だ！　どこにわしは、こんなつじつまの合はない物を、彼女のごときものを、一人の女を、見出しえようか？　こゝに女はゐるのか？

マルガレータ。　殿様！

ジークフリート。　お前は、われ／＼以上の眼力をもつてさうぢやな、さうぢやないのか？

マルガレータ。　たとへそんな事をいたしましたも、私はそれをほんの道樂でやつてるわけではございません。このわたくしの學問の御ほうびとして、私はいつかは火刑柱で、身をも靈をも捧げねばならないのでございます。して、何御用でございますか？

ジークフリート。　いや、大した事ぢやない！　大した事ぢやない！　何うだ

ね。葡萄の樹は今年^{ことし}は房の出来はどうかね？　芽を吹き出すだらうかね？　わしはその事に注意を向けなかつたのだが、しかしわしはそれを知りたいのだ！　天界の^{やうす}風景は何ういふ具合かね？　相變らず、太陽と月とでとかくの始末をつけてる譯かね？　今は夜だ。これで明日もちやんと夜が明けるといふことを、たしかに信じてもいいのかね？

マルガレータ。　お休み遊ばせ！　お休み遊ばせ！

ジークフリート。　一切はこれまで通りになつてゐるのか？　神と世界とを結びつけてる、糸がたち切れたのではないか？　萬象はもの狂ほしい渦巻をなして、バラ／＼になつて、回轉してゐるのぢやないのか？　それならば、ゲノフェーファよ、お前の罪をいひ解かうとする何人も、わしのところへ來ないでいゝんだ！

ゴロー^(ふかい震撼されて、うちくづ)。　伯爵どの、私はうそをつきました！

ジークフリート。そなたがうそをついた？

(劍を抜きはなつて)

鞘に納まつてをれ、

なぜなら、わしはたつたいま、宇宙の萬象はなほ以前のやうになつてるといふことを、聞いたからだ。彼女が行つたおるまじき罪行は、今の今までわしには、あらゆる非行の限度と思はれてゐた。然しそれは、かゝる嘘言とくらべては、生れたての赤子のやうに罪がないのだ。いや、ゴローよ、そなたが自身を告發しようと思ふなら、人間の出来る範囲内で納まつてゐてくれ。それならばわしは恐らくわしの劍をもつて、そなたにこの世のいとまを告げさせてやらうに。そなたは嘘をついた！ 起つて呉れ！ (彼に手をさし出して)そなたは男だ！ (彼を抱き)立派な友人だ！ そなたはそなたの命をなげうつて、愛と信實との最後の夢をば、せめてこの一夜のために、わしに見せて呉れようと思つたのだね。わしはそなたに感謝する——たとへわしがわしの妻と、彼女と同時に人類の半分をあきらめなくてはならなくてもな。わしは今、そなた

をなぐさめてくれるものを、かつわしをもう今から絶望に對して防いでくれるものを、見出したわけだ。

ゴロー(きいとれぬ)。私はうそを申したのです。

ジークフリート。御願ひだ、もう一度そんな事を言つてくれるな！ 人間は

弱いものだ。そして女といふものが何んな事をしでかし得るものか、そなたには分からないのだ。そなたはまだ愛したことはない。より、善き感情をおしのけつゝ、盲目的な怒りに驅られて、わしはそなたを斬り倒したい、そしてすぐに遠い國へひつこんで了うことが出来ればいゝが——さうすれば、わしの妻が罪ある女か、それともそなたが嘘つきであつたか、一生分からず済むであらうに。(座つて、頭を手でおさえる)

マルガレータ(ゴローに)。あつばねな人ぢや。一——二——三！ 三かの？ わ

しの考へぢや、たつた二ぢや。三つの中の一つの頭をそなたは契約で買ひと

つてゐる。わしの年とつた頭とカタリーナの頭とで充分ぢや。「私はうそを申上げました！」三度目にさういはしやい！ たゞかうつけ加へるのぢやぞ——わしは外の兩人の眞似をしてうそを申したのです、とな。何故にわたしどもがうそをついたかは、黙つてゐなされ。罪なき心をにくむ念からとか、徳をねたむ心からとか言はしやれ。さう申したとて、わしだけの事にすれば當つてゐないことはないのぢや。わしは事柄をありまゝにもの語らうなら、そなたはわしがうそを申したといふであらうが。わしは誓言しようか——だが、さうしたとて何にならう？ わしは女ぢや。そなたは男ぢや、立派な御友達なんぢや！ それでそなたが叛逆に對するそなたの憎惡を、根づよく現はさうとするなら、手はじめにわしの頭をうち落としてくれい。それからそなたの母の頭をうち落とすのぢや！ 母とは何ぢや！ それはそなたの母ぢやないのだ！ その女はべつに義務もなかつたが、たゞく愛情から、親切

心から、やつたとことをやつたのぢや。さあ！ すぐさま、他人とほんとの息子とは、何處がちがうのか、その女に證據を見せてくれ。何ぢやの！ 老いぼれの女と美しい女——それが問題になつてゐるのに、ためらふ仁がどこにあるのだ？ さあ、さあ！ はやう、「私はうそを申しました！」と、いひなされ。だがの、さうしたからといつて、伯爵のが、そなたを許すやうに、またわしらの二人を許しなさるだらうと、思ひ込んで間違ひぢやぞよ。そなたが正氣を失つて床についてゐた時、奥方がどんなに吾々共の爲に苦んだか、どんなにグル／＼とあるき廻りながら、死の近づくのを待つてゐたか、そなたはまだ知らないのだ。それをあの方の夫が聞き入れたなら、吾々共には「主の祈禱」をする時間も下さらぬであらう。尤もわしはそんな事は何うでもいゝがの！ わしはそんなになつてもそんな祈禱はやらぬであらうからの。

コロロ。 いや、はや！ おい、わしの前言取消しは何の効果もなかつたん

だ。殿はわしといふものに一層信頼するだけなんだ。かういふ譯だから、殿は地獄のものになるより外はないんだ！

マルガレータ。 さういふつもりで、あんな事をいつたのかの？

ゴロ。 いや、そんな事はない！ たゞさういふ事になつて了つたんだ！

ジークフリート(起ち上がつて)。 わしの心眼はわしには何の役にも立たないのだ！

夜は、それが生んだ妄想を、とりおさえてゐるのだ。わしの要するやうな繪姿は、わしの精神(こころ)に現れて來ない。わしには彼女の泣いてる姿は見える。わしには、東天紅のやうにやさしい天使達が、彼女の涙を飲んでるところは見える。彼女が晝間みせて呉れたものは、何でもわしは見ることが出来る。しかし彼女が暗黒のなかでやつたことは、些とも見ることは出来ないのだ。お、ゴロよ、さういふ繪姿をわしに描いてくれ。さうすればわしは、自分の屈辱を視ながら、わしの男子としての義務を果たし、そのために復讐すること

も出来るであらうに！

ゴロ。 あなたに御出來になるでせうか、あの方を――

ジークフリート。 わしはなしうるか何うか知らない、たゞせねばならぬことだけを知つてるのだ！ わしがそれをやつて退けたときに、わしはその事を心弱くも後悔するかもしれない。それからといふものはわしの生活は、自己憎悪と自己輕蔑とに分たれて了ふかもしれない。さうならうと、何うならうと、そんな事は尋ねてゐる暇はないのだ！ 一人の僧侶が、汝は汝の内部なる神を殺戮し、汝の五臟六腑を切り劈くところの者を許すべし、とそちにいふなら、そのときは彼をあざ笑つてはならぬ。しかし彼のいふことに従つてはいけない！ それを許してもさしつかへないのはたゞ、不思議にも近くにあると同時に遠くにあり、何者からも淨められず、何者からも汚されざる一人者だけだ、彼ひとりだけだ。そちの方では、そちはたゞ身を純潔に保つべき

である。これ諸々の命令のうちの第一の命令だ。そしていやくも男たるものは、それが唯一の命令であるかのやうに、それを果たす可きだ。何んな事が彼にぶつかつて来ようとも——つねに彼には、自己の内部なる「性」を充足せしめるに要するだけの、力は残つてゐなければならないのだ。わしは、罪ふかき頭を胴から切りはなす手斧であらうと思ふ——その斧はどつかの隅に投げ出されたまゝ、そのときの血痕のために、人しれず錆び朽ちて了ふのであらうが。だが、わしが此處へ来たわけは、老女よ、一寸——

マルガレータ。 何でございませぬ、殿様？

ジークフリート。 お前は「時」といふ本をあらちちとひるがへす法を、しつてる相ぢやな。お前は、ひそかに葬られた悪事を、過ぎし日の墓場から掘り出し、それを裁判官の目前に出して見せることが出来るのだな？

マルガレータ。 私がいろ／＼のものを見ることに出来る鏡をもつてゐる、とい

ふ事は本當でございませぬ。貴重な品でございませぬが、私としては、こんなものがなまじなければ、と思つてをりますのぢや。私自身は一度ものぞいたことはございませぬ。見たいと思ふものも、ございませぬ。尤も、身分の善い殿方のお役には立つのでございませぬ。しかしどなたも御出でにならない方が、私にはうれしうございませぬ。何故と申しますと、いやなものを御覽になるか、何物も見えないか、何つちかでございませぬものね。

ジークフリート。 お前は、一體、わしがだれだか、しつてゐるのか？

マルガレータ。 あなた様は、だれでもうそを申上げたり、欺いたりすることの出来ない方です——盲人だけは、むろん、別でございませぬが。こゝに御いでになるあなた様のお友達は、御見受け申したところ、眼をもつて御いでです。それでも、何でございませぬ、だれでもある人を信用いたしますと、度をこえて信用いたすものでございませぬ。(ゴロ)御免なさいませぬ！

ジークフリート。まあそんな御談議はやめにしてお前の鏡の中、わしの妻と、彼女が九ヶ月まへに何んな事をしたかを見せて呉れい！

マルガレータ。はい、それでかういふ譯でございます。私めは、悪魔が知つてゐただけの事を知つてゐるのでございます。そこはよく御心におとめ置き下さい。あなた様の奥方がゆくべき時に懺悔に御出でなされたか、奥方が施しをおやりになつたか、巡禮者に着物をおやりになつたか、そんな事はこの鏡には映らないのでございますぞ。ですが、奥方がまあ、あらぬ人を御接吻になつたか、或は奥方がその——まあ、さういつたことなら、もしそんな事がありうるとしますればちやの、あなた様は私の鏡の中で御覽になれるのちや。だがな、あなた様に報告されたことは、何事であれ——おや／＼、あなた様は奥方のことを憤つてゐられるやうちやの——そりや嘘いつはりです！
(ゴロ) 悪く御取りにならんでな、若旦那あなた御自身が御だまされに

なりませうものな！

(ジークフリート)

あなた様のやうな所天をもつてゐる女はの

——私はおべつかは致しません——さういふ事は老婆ははには似合ひませぬ程にな——さういふ女は、操は堅いものです。何しろ自分の所天にひとしいほどの第二の所天もみつからないでせうし、まして彼をしのぐほどの所天は、金輪際みつからないでせうからの。さういふ女は操を守らずにはゐられないものです。一旦高いところのぼつたものは、だれでも降りるのはいやですからの。鏡の中を御覽に入れるのは、そりやもう御安い御用でございます。たゞ御願ひいたして置きますが、あなた様は何も御覽にならなかつた時に、鏡をうちこわしたり、私の術を御叱かりになつたり、なさらないで下さいませ。

ジークフリート。

話は止めて呉れ！

マルガレータ。

と有仰るのは、始めいとこの事でございますの。宜しうござい

ます！ 尤も一つ条件があるのですよ！ 今は、かつて世界を創造し、世界を維持してゐる方のことを、御考へにならないで下さい。たゞ、太初このかた世界を恐れ戦かせ、その中心を大爪をもつてひつつかんで、それを痙攣させて了ふ者のことを考へて下さい。(彼女はひろい環を描いて、その中にジークフリートにあげて、陰鬱なおごそかさなす。)私を支配してゐる者をふるへさせるものよ、汝はこの環より出なければならぬぞ。おそらくこの中にたゞよつてゐるところの、人間の祈禱の靈氣よ、わしはお前たちをこゝから吹き飛ばすぞよ！ 活々としかし音もなく空中におよいでゐるところの、汝、創造し生み出す力よ、こゝへ迷ひ込んで来てはならぬぞ！ (間。)さあわれ／＼は孤獨になつた。しかしもうさうながいことはありませんね。(彼女は腕をさげ、手を地の方にのばし、呼びいだすやうにいふ。)第一の者に爲に諸々の肉體を作り、そしてそれらの肉體の内に彼の精靈をとりこにする、汝、第二の者よ。あらゆる生成する者の卵の中に忍び込み、そしてあらゆる血を

汚して了ふところの、汝、最も秘密なる者よ、わしは汝を呼び上げる！ 未来において、わしの地獄の苛責を二倍にしてもよい、たゞ今日はわしのいふ事をきいてくれい！ (彼女は鏡を蔽つてゐる紗をはき取る。ほの狂はし。)言葉のなかの言葉を――始めてそれを見出し、他のものに呼びかけながら突進する者を、勝利者に、永久の勝利者にまでなすところの、言葉の中の言葉にちかつて、これからもなほ発生すべき「悪」にちかつてもの申すが、すでにこれまであつたところの「悪」をば、たちどころにわしに見せてくれい、そして(聲ひく) これまで起こらなかつたところの事をも示してくれい！ (鏡の前に一つの煙がとぶ。すぐに消える。マルガレータはジークフリートの腕をつかんで、彼を鏡のところにつれて来る。)

ジークフリート(のぞき)。ありや彼女だ！ さうだ！

マルガレータ(おど)。

ゴロー(マルガレータに)。

気が狂つたのか。わしのいふことをきいてくれ！

マルガレータ。 そんな事が出来るものか！ 不思議な力がかうさせるのだ！ 悪魔がその言葉を見つけたのだ！ ヴィクトーリア、萬々歳！ 悪は善で、善は悪なんぢや。一緒に踊るが好い！ わしはお前にそれを許すぞよ！ お前はこゝへ這入る事を許されると、わしは思ふがな！ お前は捨兒なんぢや。お前は、お前の親父をもう打ち殺したんぢやないと、たしかにいへるのか？

(彼女は絶へず踊り続ける。)

ジークフリート(鏡の前)。 彼女は人しれぬ思ひにこがれて、ぼんやりとみつめてゐる。わしのためなのか？ 自分のことなのか？ ぶしつけない鏡め、貴様はおれの頭の白髪まで見せて呉れるのだな。

ゴロー。 おれはこんなに恐れ戦いたことは、これまでにない。一疋の甲蟲が、ブーンと飛んで来て、この環のなかに飛び込んだ。きやつは、こゝには空気がないかのやうに、死んで了つた。

マルガレータ(踊りながら、有頂天の絶頂にのぼつて)。 それを言つて了へ！ 言つてしまへ！ さつきから耳を澄ましてゐるのだ？ お前は何をぐづくしてゐるのだ？ (口を) お前は祈ることが出来るのか？ まあ、いのつてくれい！ (彼女はたふれる。)

ジークフリート(鏡の前)。 何ぢや？ そちは眼が無のか、美しい妻よ？ 下郎め、貴様は大それた奴ぢや！ 彼女の手に接吻をするのか！ もうあの手におれは、決して接吻しないぞ！ そちが叱りつけもしないとは、一體そちは啞なのか、ゲノフェーファ？ えゝ、そちは彼奴の上に身を屈めるのか？ 彼奴の齒をむき出して笑つてゐる様は！ 彼女はいま——えゝい、いま／＼しい奴め！ 彼奴は赤くなつてゐるのに、彼女はそんな様子は更でない！ これで、もうよく分かつた！ そちはそれに気がつかないか、わが友！ 彼奴は見廻してゐる。何でそんな事をするんだ？ おれは軍さに出てるんだ！ いや、またあんな天使のやうな顔をしくさるのか？ よし、あばたのドラゴ

「よ、よし！ さあ、もう貴様の勝手にするがい、ぞ！」

マルガレータ(その間にまたたち上がり、ジ)。御機嫌いか、あらせられまするか、御

前様！ あなた様はたゞのぞいてゐらっしやるばかりぢやのう！ 何うか、

奥様へ私めからもよろしくな！ (彼の肩こしに) ほう、これは何ぢや！

ジークフリート(彼女の前に来て)。こんな下郎めが！

マルガレータ。さやう、たしかに皇帝ではありませんの！

ジークフリート(猛然とし)。たとへ皇帝であらうとも——

マルガレータ。それでぢやな、奥方は王子を御産みなすつて、大それた過失

のつぐなひをなされましたのぢや。だが、それはもう宜しうござりませう！

さあ、何んな具合かの？ (彼女は再び彼の肩越しに覗き込む) 消え失せい！

ジークフリート(何うすることも出来ないやうな憤怒)。こりや悪魔のさせた業だ！ だ

がわしは悪魔の所業を許してやるわい。わしにそれを裏切つてくれたのも、

悪魔なんぢや！

マルガレータ。あなた様の顔には、人間がそれをいへば、彼を神にするやうな言葉が、読めませんの。まあ、可哀想な女子さん(おなご)、そんな事は何うとも分かりやしませんの！ 悪魔は「眞實」をいふ男ではありませんぞ。わしは一つ彼を試してみませう、そして「未來」の門を開いてみませうぞ！ (短い、黙せる呪文、それが)

(彼女が玻璃面をのぞきこむ) 鏡面！ いま／＼しい奴め！ わしはお前をうち砕くぞよ！

お前は美しい奥方の頭のない姿を見せるのぢやな！ 何ぢや？ ほんの、口

が少しばかり罪を犯したといふので、すぐに頭まで斬り落とすとは？ 一體

眼は何をしたんぢや？ うち斬られた、ほッそりとした白い頸が、何をしたと

いふのぢや！ (ジークフリートに) 殿、この方を嘘つきにして御了ひなされ！ 「未來」は

この場合、あなた方二人きりで、何うともなるのぢや！ それで「未來」が、

悪魔がみせてくれたとはちがつたものなら、さうなつたら、「過去」は何ぢや、

何でもないではございませぬかの？

(彼女は悪魔のやうな偉力につかれたやうに狂ひ廻る。)窓を開けろ！

扉といふ扉を開けて了へ！ 出ろ！ わたしの體をもちやげるだの！ わしを荷ぐのぢやない！ 何處へ連れて行くのぢや？ わしは空を飛んで行くのだな！

(彼女は鏡の中をのぞく。彼女の顔の代りに悪魔の恐ろしい顔が、齒をむき出して笑ふ。)悲しや、おそろしや！ こりやわしの姿ぢやないのだ！

こりや彼奴なんぢや！ 出ろ、出てくれい！ わしの體は貴様の住家ぢやないがな！

(彼女は自分の體を打つ。)かう痛めつけたら、貴様も痛くなつて、逃げ出すであらうが！

(彼女はふたゝび悪魔め！)まだ悪魔がゐやがるのぢやない！ おゝ！ おゝ！ おゝ！ (彼女は氣絶して倒れる。あらゆる蠟燭が消え、マルグレータの體から赤い光りが出て行く。)

ゴロー(話さうとするが、話し得ない。)

ジークフリート(今行つたことは少しも氣がつかない。彼はその劍をはずして、ゴローの方に歩み寄る。)このわしの劍を取つてくれ！ わしにはそちのを渡してくれ。何の爲かは、分かるであらう！

ゴロー。 殿！

ジークフリート。 そちは彼女を殺して呉れ。そしてわしはその命令を撤回するやうになつたら、わし自身を殺して呉れ。わしの駿馬は、鞍を置かれ、手綱をつけられて、もうすぐにも乗れるのだ。それにまたがつて、早く乗ら

呉れ！ わしがそなたのあとを追ひ、そしてわしがそなたに追ひ付くであらうなら——そんな事にならぬことを、希望するが——そのときには劍を抜きはなて！ ——そちは黙つてゐるな！ わしの怒りにちかつていふが！ ——

そのときは劍を抜き放て、そしてわしの名譽を代なしにするやうな言葉が唇から洩れないうちに、わしをば斬り倒して呉れ！

ゴロー。 あの子供は——

ジークフリート。 ドラゴームの私生兒か？ そちは何を尋ねることがあるのだ？ たとへ彼女の子供がわし自身のであらうとも——斬つて了ふのだ。息

だ？ たとへ彼女の子供がわし自身のであらうとも——斬つて了ふのだ。息

子なら、成人して人にだまされぬやうにだ。娘なら、成人して人を欺かぬやうにだ！ 汝等、混々として湧き出でる自然の噴泉よ！ わしは汝等をふさぎとめることは、出来ぬものな！(ゴロ)印の指環をもつて、呉れ！ 尤もわしのおきにも、それは必要になるのだがな！ わが昔の先祖の靈よ、御許し下さい、わしと共にあなたの名も苗裔も消えて了ふのです！

マルガレータ(身をゆりうごかす。彼女は身を起さうとするが、また後へ。にドウと倒れる。彼女は話さうとするが、話さない。)

ジークフリート(ゴロ)。そちはまだ居るのか？ 行け、と申したら早く行け、下郎め。いや、許して呉れ！

ゴロ。私は御意の通りにいたしませう。

ジークフリート。ものを十だけいへば、十だけの死罪に當るぞ！ 早く行け！

ゴロ(去る)。

ジークフリート。悪魔よ、よく聽いて置け！ 貴様がドラゴームを、たつた

三十分でもよいから、肉と血をもつた體にしてまのあたりわしに見せてさへくれるなら、さうするとわしは事の真相を——その代りにはわしは、體も心もともにお前の支配に任して了つて、一本の髪の毛だつてお前から取らうとはしないのだが——わしは彼を墓場から出て来た齒をもつて齒をひっつかんでも墓から引きずり出したいのだ——何故だ、といふのか？ それが彼でなければ、外の奴がさうなつたのだ！ 眠れ、下郎め、眠れ！ 最も悪性の女でもやり兼ねるやうなことを、彼女はやつたのだ。罪のどん底なんだ。どんな女でもそれより下へ沈むだことはないのだ！ そして彼が彼女を再び見たとき、彼女がいやらしい陶酔から醒めて、われとわが手で自分をしめ殺しえなかつたほどに、自分の所業に堪えてゐられたとは！ あさましい骨頂だ！ きけ！ 馬をひいて來い！ おれの馬はやつと出たところか？ 早く、ゴロよ、急いでくれ！ おれはお前に鞭を渡したい！ (去る)

マルガレータ(牛ば身を起し、腕。いたまいてぬる)。まき込まれた！ しめられた！ 咽喉もとをしめつけられた！ 血を放出さしにや！ 血を放出さしにや！ (彼女は血管を噛み切る) 噴き出るのは血かな、それとも火かな？ 水をくれい！ 空気を呉れい！ まだわしや生きてゐる！ まだわしや生きる権利があるわ！ 飲め！ 吸へ！ まだわしは飲めもするし、吸ふことも出来るからな！ やがてそれも出来なくなるのぢや！ それからぢや！ それからぢや！ 可愛想な人の子よ！ 火焰はほのほから食ひつかれる！ それでも決して食ひつくされはしないのだ！ 永久にかけて！ 永久！ そして眼の中にすら、お前のまつげに燃えつく焔をば防ぐ滴も、もうないのだ！ お、わしはもう一度子供になれ、ばよいが！ 子供にな！ わしは一體、いつか子供であつた事があるのだらうか？ (は彼女) 子供！ 母の腕にすがれる子供！ おや、今度は何うしたことぢや！ まあ、まあ！

雷鳴。ドラゴンの霊が床からたち現れる。

マルガレータ(とび上がりて)。だれがお前を呼び出したんぢや、霊よ？

霊。わしをお前にお遣はしになつたのは、神ぢや！

マルガレータ。たち去れい！ わしは神のいふことなどは耳に入れぬぞ！

霊。お前が神を呼び出したのぢや！ そして神はわしの口を通してお前にかう命ずるのだ。七年たつと、カッキリ七年たつとお前はたち上がるのだ、そして伯爵ジークフリートに見参するのだ。お前はまた、お前が彼を見出すまでには、百哩もあるかなければならないのだが、お前がもつともひどい罪を犯した彼を、お前の怒れる裁判官さばきとなし、そして罪を懺悔しなければならぬのだぞ。お前自身が、お前が過去をふり返ると、お前に齒をむき出してゐる悪行の一々を、お前に訴へるのだ。お前自身がお前に火刑の薪をつみ上げるのだ。お前自身はその焔をかき立て、その中に飛び込むのだ！

マルガレータ(ふるへ作ら、卓子)により懸り作ら。そして——その——代りには？

靈。その代りにお前は、何も御禮はもらへないのだ！

マルガレータ。お前のいつてゐることは、うそ、いつはりぢや。お前はわしを恨んでゐるので、そんな事をいふのぢや！

靈。わしは、わしに對して罪を犯した女¹⁵のことは、もう何も知らぬのぢや。わしの知つてゐるのは、わし自身が悪いことをした女¹⁶だけぢや。他人¹⁷の罪を宥しうる程の正しさがわしに残つてゐるなら、わしは幸ひなのぢやが！

マルガレータ。服従しながらも、わしは反抗するぞ。さうぢや、わしはその事を自白しよう。しかし七年の後ではなく、明日にもさうしよう。さうすれば、わしを強ひる男が、うそつきになるのぢや。なに、屹度さうするわ！

あの女を救ふのは、明日でもおそすぎる。しかし彼の心の中に悔恨の蟲をおくには、早すぎることはない。あの男がわしの考へてるやうな男なら、彼は

わしに對して仇をうたないうちに、もう正氣を失つて、倒れて了ふのであらう。そしてたとへ彼がわしの死刑執行人とならうとも、それが何ぢや？ さうすればわしは火にやかれなくてもすむといふものぢや。

靈。時は満期となつた——地球といふ汚された球が、すでにたち上がれる神の手からの雷で、うち砕かれて了はない爲には、新たに罪を淨められねばならない時は、満期となつたのぢや。神はこの世の出來た初めに、千年ごとにたつた一人でも神の前に顔むけの出來るものさへ出れば、決して哀れな人類は亡ぼさない、といふ恵みぶかい誓ひをなされたのだ。神の眼は今やゲノフィーファの上にそゞがれてゐる、そして外の人間をみて居られない。七年のながい、ながい年月、彼女は人間の忍びえられる限りの苦みを、忍ぶであらう。わしはそれを見ると、戦きふるへすにはゐられない。ところがおれはそれでも遙かあなたに、彼女を待つてゐる冠の輝いてゐるのを見た。七年たへ

ばやつと試練の時が終わるのだ。しづかに彼女は、永久の光耀の中にはいれるのだ。そして新たにされたる信念の感情が、活氣づけるやうに、あらゆる人間の胸を貫くであらう。お前はそれで彼女の汚された畫姿を淨めなければならぬ——そして世の人をして、彼等の祈るべき、新しい聖者を認めしめ、ほめたゝへしめねばならない。しかしその時よりも早くやつてもいけぬし、おそくやつてもいけないのだ！ お前がむほん氣を起こして、定められた日の前に口を開かうものなら、お前は啞になるのだ。そして相圖か何ぞで話さうとすると、手足が麻痺^{しび}れて了うのだ！

マルガレータ。 啞だと！ 手足が麻痺れると！ さうなりやわしは自殺するまでぢや！

■。 そんな事をやらぬがいゝぞ！ 火焰の中でお前は、さんせい^{さんせい}のうをになつて了うだらう！ 水の中では魚になつて了うだらう！ 大地の胎内では

地蟲にならう！ 鐵や鋼鐵でぶつきられても、石で造られやうになるのであらう！ だれか外の奴が出て来る！ おれはひつ込むぞ！

マルガレータ(笑ふ)。 もう七年だと！ 凱旋ぢや！ さあ、聖なる女よ、わしとたゝかへ！ 神がお前を見下ろすなら——神はまたわし¹⁸をも見下ろすはづぢや！ (地の方に) こりや！ これ！ 何ものも浪費してはならぬぞ！ わし

以外のお前の幕下から、ひき退け。そしてわしの身から、地獄の中心を、お前が火を吐き出す所のたつた一つの洞穴を造つてくれ！ あらゆるお前の思考^{かんが}を、わしの脳髓を通してゆかしめ、起こるべきところの事を、わしを通して起こすやうにせい！ そして未來のためには、何物も貯へておいてはならぬぞ——さうすれば、彼女とわしとを觀察しながら量り比べてゐる神は、秤をば投げ捨て、同時に、一つ以上の世界を滅ぼすところの稻妻を投げるであらうぞ。(彼女はそこにスツクと立つてゐる。火焰が) ヒラ／＼ひらめいて、彼女を照らす。

第五幕

早朝。城中の廣間。

第一場

ゴロー、ハンス及びバルタザールと共に登場。彼は外套と拍車をつけてゐる。

ゴロー(ジックフリートの印)。そちらはこの指環を知つてゐるか？

バルタザール。それは伯爵どの、指環です！

ゴロー。そちらはこの劍をしつてゐるか？

バルタザール。それは爵伯どの、劍です！

ゴロー。それならば申しておくが、この劍をば伯爵は、それを以て奥方の

頸をぶっ切るために、わしに御渡しになつたのだ。この指環は、おせっかいな人間や同情を表する人間が、伯爵の意志の眞面目さを疑はないために、御渡しになつたのだ。

バルタザール。それは手落ちのない御處置であつた。

ゴロー。お前達兩人に尋ねるが、お前達は奥方に對する御命令を果たすことが出来るかな？

バルタザール。われ〜兩人が？

ゴロー。お前達は承諾をするために、そんなに考へ込まねばならないほど、臆病者なのか？ それならばいつてやる事がある！ あちらへ行つて、ひそかにお前達の髻を刈つて了へ。なまじそんなものがあるから、お前達は、自分分は男だと思ひ込んでゐるのだ。

バルタザール。何故またあなたは御自分でおやりにならないのか？

ゴロー。 わしは裁判官ぢや、しかし死刑執行人ではないのだ。そしてわしはお前達の顔を立て、やらうとしたんだ。ハンス、お前は何うだ？

ハンス。 私はひきうけます！

バルタザール。 そなたはやるのか？ そんならおれもひき受ける！

ゴロー。 それなら早速に！

ハンス(半ばひとり言)。 さうしたところで、おれははじめて女を殺すんでもないんだからな！

バルタザール。 そりやわしは、とっくに知つてゐるよ！

ハンス。 うそを吐くな！

バルタザール。 そなたはひとり寝の方がよかつたんだな！ エルザさん！

ハンス。 おい、バルタザール！

ゴロー。 そんな事が、一體何うしたといふのだ、ハンス？

ハンス。 それがなんでもない事ならば、私はそれを白状しませう！

ゴロー。 何したといふのだ？

ハンス。 私は、私が戀を求めたときに、私をあざわらひ、私の戀をしりぞけた一人の女を、殺したのです！ あのおそろしい頭のわれ目、空を睨んだ眼、彼女が倒れる前に、握りしめた拳——あゝ、まだ眼に見るやうです。

バルタザール。 悪漢め！

ゴロー(怒つて)。 貴様は何を賭ける、わしは貴様のある一件をぶちまけるぞ！

バルタザール。 さあ、せいとく、他人の鞆に手を入れた位ですがな！

ゴロー。 さうさ！ 伯爵の鞆に手を入れたのだ！ 貴様の盗んだのを、わしは自分の旅袋からおぎなつて置いたのだ。さうしなければ貴様は、樹木の見つかり次第、絞罪に處せられるところだつたのだ。だが、そんな事をまあ恥ぢ入らんでいゝ、しかしこの殺人者に、わしがすると同じやうに、握手を

せい！ わしはその當時は、何故にあんな事をやつたか、分からなかつた。しかし今わしにはそれが分かる。わしは寛仁大度といふことに、惚れ込んでゐたのだ。そしてわれ／＼は單に言葉だけではなく、行爲を以ても、自分をかざる事が出来るのだ。

バルタザール。 さあ、あなたがそれを知つてゐられるなら、私も白状いたします。しかし、あなたに現場をとり抑えられたにしろ、自分の慾望の爲にそんな事をやつただけは、思はないで下さい。たとへ私はあるとき、竊盜をしたといふ事を打ち消すことは出来ませんでした、私はそれでも、いかにも感心な魂膽をうち明けて、その行爲をかざることが出来たでせうに——あなたがそれを御許しになる許りでなく、それを感嘆して下すつたであらうほどに。

ゴロ。 えらい見暮ぢやな。

バルタザール。 私はあの前の日に、その日の暮らしに困つてゐる炭焼きのところに、立寄つたのです。私はそこへ行つてかう言つたのです、「ハインツ、おれの言葉を覚えてゐろ——お前を助ける爲に、おれは、神に對しても、殿様に對しても顔向けの出来ないやうな事を、やつて見せるぞ。」そのとき私はもうその事を念頭に置いてゐたのです。あなたにつかまへられるやうな事をしたとすれば、それは心の弱みのために、炭焼きに對する同情の爲めに、そんな事をしたのです。そしてその男もその證人になつて呉れたでせうに。

ゴロ。 貴買様は立派なわるものだな！ ところで肝心の話に這入らう。十五分以内にお前達は牢塔へ下りて來い、そして口笛を吹くのだ。わしは早速扉をひらいて、お前達に罪ある女をひき渡すであらう——わしはその前に彼女に死を宣告しておかうと思ふのだ。

バルタザール。 奥方はまだその事を知つてゐないのですか？

ゴロ。 無論、知つてはゐないのだ。わしはたつた今、馬から降りて来たところなんだ。それからお前達は、彼を子供と一緒に連れ出して――

ハンス。 御話し中ですが――子供も一緒にやるのですか？

ゴロ。 殿はさう御命じになつた。

ハンス(バルタザールに)。 お前は子供をやっつけるが好い。おれはその代り奥方の方をひき受けるぞ！

バルタザール。 くじ引きがいゝではないか。

ゴロ。 そんな事はあとにして、わしの言ふことをきいて置け！ お前達は兩人のものを森の中へ連れて行くのだ。それから小徑から右手へ折れて、ドン／＼行くんだ。さうすると泉のあるところへ出る――

バルタザール。 その場所をわしはしつてゐます。いつかわしはそこに、奥方の座る芝生の台をつくつたことがあるのです！

ゴロ。 泉のそばで止るのだ、そして――(戦慄しつゝ話しなとぎらせる。)

バルタザール(頭をはれるやうな動作をする)。

ゴロ。 その通りだ、バルタザール！

ハンス(うっかりしたやうに)。 子供を！

バルタザール。 祈禱は許すのですか？

ハンス(怒つて)。 まだ尋ねることがあるのか？

ゴロ。 主の祈禱を一つ！

バルタザール。 百を数へるまでですか？

ゴロ。 さうだ。

バルタザール。 死骸は？

ゴロ。 すぐに埋めるのだ！

バルタザール。 分りました！

ゴロ。 いゝか、右手の泉のそばだぞ！

ハンス。 この男がその場所を知つてゐます。

ゴロ(バルタザールに)。 も一つ言つて置くことがある！ 伯爵は、わしがストラスブルクを出るときに、かういふ事をわしに呼び掛けられたのだ——わしはすぐにそちのあとから追つかけて行く。そして館についたときに奥がまだ生きてゐたら、わしはそちを、奥どうやう、斬り捨てて了うぞ。女めが不憫にならうとも、容赦しては相成らぬ——さうすれば頭が飛ぶ事になるのだ、とな。

ハンス。 私もその御言葉をきいたのです。私どもは、御命令がはたされた證據として、奥方の髪を切つて参ります。

バルタザール。 むしろ眼をくりぬいて來る方が、宜からうではないか？

ハンス。 そなたにそれがやれるか？

バルタザール。 奥方が死んだら、すぐやつて見せる！

ゴロ。 わしは一つ知りたくてならぬことがあるのだ。

ハンス。 それは何ういふ事です？

ゴロ。 奥方が牢獄の暗闇くらやみの中でだな、わしに嫌疑のかゝり相な、毒々しい作り話を考へ出しはしなかつたか、何うかを知りたいのだ。

ハンス。 どうして奥方にそんな事が出来るでせうか？

ゴロ。 お前はまさか、奥方がわしを憎んでるにちがひないといふ事を、うたがひはしまいな？ 一體、奥方の行跡をさがし出し、奥方の罪を告發したのは、誰だと思ふ？ 奥方がすべてを、心情こころも手もさし出して、歸國の途にある所天を、藪の中から一撃ちに打止めて呉れと頼んだ人間は、誰だと思ふ？ そしてそのとき、さげすみの眼を以て奥方に背中を向けたのは、誰だと思ふ？

ハンス。 奥方はそんな非道いことを言はれたのですか？ あらゆる悪魔にか

けて言ふが、そんな女をきり殺すものは、善行を行つた事になるんだ。

ゴロ。 ハンス、そちは賭けるか？ そちが一番先に奥方の作り話を信じはしないかな？ さうなつたら、何うする！

ハンス。 この身ぐるみさし上げます！ 胴衣をさし上げます！

ゴロ。 よし胴衣を賭ける！ そちが歸つて来て、一瞬間でも心が動じなかつたといふ事が分かつたら、わしの新調の遍條まきべづきの服をそちにやることとする。しかし若しもそちが馬鹿々々しい氣持を起こしたとなつたら、バルタザールがそちの胴衣を剥ぎ取つて、それを取つて了うのだ。わしがバルタザールにそれを呉れるのだ。それなら、十五分のうちに、よいか！

ハンス及びバルタザール（たち去り）。宜しうございます。では、牢塔でまた！

ゴロ（帳面をひき出し、一葉の紙をひ）。お前は、それはお前の眞意でないといふ

ことを、たしかに知つてゐるか？ お前は、事が迫るや否や、藪から現れ出

で、彼の女ひとにこの紙片かみを渡し、そして彼の女の代りにお前自身を復讐者の刃にさし出し得る、といふことを確信してゐるか？ よく考へてみる、そしてお前といふものを信頼しすぎるな！

（彼は書）狂亂の渦卷の如きものがお前の心を占領したら、何うする？ お前が殺害者せつがいしやが劍を抜き放つが早いか、あの

女ひとに對して手づからむごたらしい仕事を行ふためにのみ、彼から劍をもぎとるやうになつたら、何うだ？ その劍が生命をえたかのやうに、お前の手の中で、廻轉したら、何うだ！ その劍がお前の胸へ行く路において踏み迷ひ、彼の女の胸の方へ行つたら、何うする？ 恐ろしければ恐ろしほど、お前は素早くそれをやるであらう。あらゆる感覚がうづくやうだ。神は、からうじて「自然」の終局いやはてにお前を結びつけてゐる絲を、無益にもひつばつてゐる。お前は「すぐおれは自由になれるんだ！」と考へる、そしてその絲を切つてしまうのだ！ （彼は書）さあ、かう書いたぞ！ それで俺はあの女の血ひとにひたつて、永

久にわたつておれの身を不死身にしないであらうか？ 恐れ戦きながら、心
靈をその真髓までもその中にひたらせ、病み惱める精神を恐怖のうちに追ひ
やりはしないであらうか——かくすれば、生命の泉は氷りはて、流れるこ
とを止め、意識の環は粉碎し、そして凝固せる感情は、何れの感動にもさか
らふやうになるであらう。かくすれば、天に向つて神罰をよび求めるやうな、
この前代未聞の行爲は、神罰その者に對しておれを守り防いでくれるのであ
らう——といふのは、その行爲は俺を化石させて了つたからだ。かくすれば、
さうだ、恐らく前代未聞の事が起こるであらう。そしておれは、鮮血のした
ゝる劍をひらめかしながら、茫然として世界を彷徨し、そして彼女の殺害者
は何者であるか、尋ね廻るやうになるのであらう！

(彼は紙片をたいみみて、そ
れを帳面の中に置く。)

第二場

カタリーナ、登場。

カタリーナ。一體、何ういふ事になるのぢやな？

ゴロ。一杯の葡萄酒をもつて来てくれ、そしてそれを以て牢塔について
来て呉れ！

カタリーナ。まあ、何ういふ事なんぢや！

ゴロ。分からんのか、俺はそちに酒の事を頼んでゐるのだ！ (去る。カタ
リーナ、カ
彼のあとからつ
いて行く。)

第三場

牢塔。

ゲノフェーフア。壁の凹所に、母のいくつかの衣片につままれて、子供がゐる。水がめ一つ。

ゲノフェーフア。お、寒い！ 寒い！ それでも外は夏のさかりであらうに！

わたしにはもう、時はない。もう永久のあの世なのだ！ わたしがぼんやりと寝てゐたときに、いつもわたしは生も死も、この世も墓も、すべての有爲轉變も、通りすぎて了つたやうな気がした。そしてどんな人間もまだ見たことのないものを見ようと思へば、たゞ眼を開きさへすればよかつたやうな気が、いつもした者ぢや。さうするとわたしの子供が泣きわめくのであつた。あゝ、あゝ！

彼女はその頭を卓子の上に置く。間。扉が開いて、ゴローがはいつて来る。彼のあとから、カタリーナが、一杯の葡萄酒をもつてついて来る。彼女はそれを卓子の上に置く。

ゴロー(カタリーナ)。そちは遠慮してくれ！

カタリーナ(心配相な身振を)。もつて去る。

ゲノフェーファ(前の位置に止)。つてゐる。

ゴロー(彼女に近)。眠つてゐられるのか？ 眼をさましてゐられるのか？ わ

しはあなたの殿の使として参つたのです。

ゲノフェーファ。何ういふ用で参つたのか？

ゴロー。裁きの剣をもつて参つた！ これを見られい！

ゲノフェーファ(驚い)。殿の剣を！ (卓子の上に頭を伏せる。)

ゴロー。何ういふ御心持か？

ゲノフェーファ。静かにして！

ゴロー。御話しなされい！

ゲノフェーファ。わたしには合點が行かぬ！

ゴロー。ドラゴアの夜の訪れについては、何ういふお考へをもつてゐられるか？

ゲノフェーファ。何にも！ 何を考へることが出来よう！ 殿は何う考へてゐられるのか？

ゴロ。 誰でもが考へることを、考へておられます。

ゲノフェーフ。 それで誰でもどんな事を――

ゴロ。 あなたが密通したのだ、と考へておるのです！

ゲノフェーフ。 殿はわたしをば、神がわたしをみそなはすやうに、みておられたのに。 今こそわたしの惨苦が始まるのだ。

ゴロ。 今こそあなたの惨苦は終るのでぞ！

ゲノフェーフ（跪く）。 さあ、こゝにわたしの頭がある！ 早く斬つてくれい！

わたしは、わたしの心情が殿からそむくまで、生きてゐたくない。 しかしあゝ、今にもさうなり相な氣がしてならぬ。

ゴロ。 そなたが死をえらびうるほどの勇氣があるならば、いつそ――わたしは、わしにとつては太陽であり、月でありそして星であつたところの、この美しい頭を、劔にかけるには、あまりに卑怯です。 さあ、こゝを出て、わ

しと一緒に遁げて下さい！

ゲノフェーフ。 わたしはまだそなたの心を動かすのか？ それならば、牢獄の夜は、わたしに呪咀の種となつた體の美をばとり除いて呉れる、あの最後のはかない勤務をすら、わたしに否んだのぢや。 おゝ、わたしを見て呉れい！ そなたに話してゐるのは、髑髏ではないのか？ 肉も落ちた瘦せ衰へた腕を、恐ろしげにあげてゐるのは、骸骨ではないのか？ もしさうでなければ、わたしはわれとわが身を憎み果てねばならぬであらう。 よくこの子供は乳を欲しがつて泣き叫んだが、いくら泣き叫んでも乳は出て來なかつた。 どうしてか？ 身内の血のたゞの一滴でも、この泣き聲をきいて、この胸にそゝぎ入ることを、ためらつたであらうか？ そんな事があれば、わたしはその血を呪つたであらうに！

ゴロ。 遁げて下さい！ 遁げて！

ゲノフエーファ(おそろく 子供の方を見る)。今日のまあおとなしいこと！ もの凄いやうにおとなしいこと！ まさかこのまゝになつて了つたのでもなからうが？ おゝ、神よ！ 一人の母を哀れみ、みそなはせ！ その母は大した御願ひもないのでございます！ たゞせめてこの子供の口から泣聲がきこえるやうにして下さいませ。その泣聲は、母の心臓をひき裂かすにはあませんが、それでも、その母には子供が生きてるといふ慰藉(なぐさめ)を與へて呉れるのです。これよりも小さな御願ひがあるでせうか？ 何うか、聞き届けて下さいませ、神よ！

ゴロー。子供を抱いて、わしと遁げて下さい！

ゲノフエーファ。そなたと？ 滅相な事を！ わたしの所天がそなたに委任を與へたといふなら、わたしはそれをやり遂げるやうに、そなた自身に警告します。やつてのけい！ しかし今すぐにちや！ わたしがもう生きてゐなくなれば、この嬰兒(みどりご)を見る最初の人が、それを世話してくれるであらう。そし

てどんなひどい女でも、この母がしたよりは、もつといゝ世話をする事が出来るであらう。さあ、早くわたしを殺して呉れい！ それは人のためになる業(わざ)ぢや！ わたしは今、わたしの子供の邪魔をして生きてゐるのだ。そしてわたしがなほ生きてゐようものなら、この子は死なねばならぬであらう。何故なら、わたしは何の助けにもならず、この子に對する他人(ひと)の同情(なぐさめ)を妨たげてゐるのだから！ (彼女は子供の方に歩み寄る)まだ呼吸をしてゐる！ せめて一度の接吻をいや、いけない！ そんな事をしては眼をさますであらう！ ねんねですぞ！ 殿がこの顔をはじめて見たら、何んなであらうに。ほんとに殿の生き寫しぢや！ この子が殿に似てゐるやうにわたしに似てゐようなら、この半分も愛する事は出来なかつたであらうに！ (彼女は子供の手を接吻する)永久のお別離(わかかれ)ですぞ！ そなたに祝福があるやうに！ わたしが何んな風に死んだか、そなたが決してきくことがなければ宜いが！

ゴロ。 わしは二人をはなしはしない！ 子供も一緒に死ぬのです！ 殿
の御命令ぢや！

ゲノフェーフア(もの狂ほしく、ゴロ。の
手をつかみて)。 これを見てくれい、そしてそなたが殺せ
るものか、自分の心にきいてくれい！

ゴロ。 死刑執行人といふものは、何でも出来る人間です。尤もわしは死
刑執行人ではない。

ゲノフェーフア(彼の足下に
倒れる)。

ゴロ。 世界がひっくりかへしになつた。この女は跪いてゐる。この女は
おれの前に跪いてゐる！

ゲノフェーフア。 今となつてはわしも嘆願することが出来る。

ゴロ。 あなかは接吻することも出来ますか？

ゲノフェーフア(起ち上がつて、彼。
女の顔を蔽ふ)。

ゴロ。 もう一矢を放たう。(彼は彼女の前に歩み寄
り印付指環をぬく) あなたはこの指環を知つ
てゐますか？

ゲノフェーフア(うなづ
く)。

ゴロ。 この中には毒が這入つてゐるのです。いざ！(彼の指環の内側の小ひき
出しを開き、毒を杯の中
にこぼす。それから彼はたいんだ
紙片を帳面の中から取り出す) わしに葡萄酒を渡して下さい！ さうすればわし
はそなたにこの紙片をさし出します！

ゲノフェーフア。 この紙片？

ゴロ。 読んで下さい。(彼は彼女に紙
片を渡す)

ゲノフェーフア。 わたしの眼は弱りはてゝゐる！ これは手紙ぢやな！

ゴロ。 わしの主君、ジークフリートへの！

ゲノフェーフア(静かに讀む、彼女の驚愕と恐怖
とを身振によつて知らせる)。

ゲノフェーフア(讀み了つ)。 恐ろしい！ こんな事をみんな、そなたがやりをた

のか？

ゴロー(手紙を取り、戻して)。わしはさうだとも、さうでないとも言はない。そなたの信じうることを信じて下さい。そなたがなさねばらぬことを行つて下さい。それは眞實(ほんとう)であらうが、なからうが、それはそなたを救ふのです。あゝ、咽喉が乾く。葡萄酒を渡して下さい！

ゲノフェーファ(祈りつ)。私の心を誘惑(いざなひ)におとしいれないで下さい、主よ、わが神よ！

ゴロー(ひとり)。この女(ひと)にぶつかるのは、まるで樂器の絃にさわるやうなものだ。返答(こたへ)は一つの靈妙な音調だ！ 苛責(いぢめ)によつてこの女(ひと)はますます美しくなつた。この女が死ぬときには、恐らく最も美しいであらう。(口笛が聞える)どつちかに決めて下さい！ 殺害者は外に待つてゐるのです。

ゲノフェーファ(杯をつかみ、ゴローに一瞥を、投げつけ、それをこぼす)。

ゴロー(扉の方にツカノと歩む。聲をたがめて)。そんな行爲には、かういふ報酬(ひくい)がつづくのだ！

ゲノフェーファ。人非人！

ゴロー(扉をひら)。名譽ある方々、御這入り下されい！

第四場

ハンス、バルタザール登場。バルタザールは鋤をもつてゐる。

ハンス(胴衣を指さ)。何うです、この銀ぼたんは？

ゴロー。それが、何うしたといふんだ？

ハンス。先刻のあなたの話で私は侮辱されたやうに感じました。それで私はすばやく、自分の晴着をひっかけたのです。これは私を信用しても宜いといふ證據にならないでせうか？

バルタザール。奥方の話しをきいては、ろりとなると、この男は早速奥方から
胴衣へ眼と移すのでせう。

ゴロ(剣を指して)。それは何ういふ事なんだ？

バルタザール。自分の爪をみがくものは、手でもつて墓を掘りかへしはしま
せんでせう！

ゴロ。お前達は、密通のために死刑を宣告されたケノフェーファどのに對
する判決を、直に實行するつもりなのか。

バルタザール。吾々はその覺悟をしてをります！

ハンス。申すまでもありません。それに吾々はその罪を目撃したといつて
も宜いくらゐるので、決心は一層早くつく譯です。

ゴロ。それでお前達は、奥方に對するやうに、子供に對してもやり了おは
せるか！

バルタザール。一人かたづければ、あとは同じことです。二人とも同じ血で
す。

ゴロ(ケノフェーファに)。あなたに御尋ねします。不義の快樂けらくを禁ずる御律おきてを犯し
たが爲に、あなたを罰する爲に、わしのえり出したこの兩人は、あなたのお
氣にかなひましたか？

ケノフェーファ(黙す)。

ゴロ。あなたは否とは言はれぬのか？ つまり沈黙の承諾ですな。わし
はこゝで、殿が御命じになつたやうに、すべてを處置します。(ハンス)この極
刑の裁判は、充分な贖罪を現はしうるやうに、殿の御帶劍を以て、行はれね
ばならぬのぢや。これを取れ！ そして僕しもべにふさはしいやうに、それを持つ
て行くのだ！

ハンス(劍をかつて腕にかひ込む)。

ゲノフェーファ。どうか、他の劍ほかににしてくれい、何物も殿の心を後悔せしめないなら、この劍けんがそれをひき受けようから！

ゴロ。それは相成らぬ。殿がその事を命令されたのです。子供をお取りなさい！

ゲノフェーファ(氣してんと)。この家來どもは！

ゴロ。ハンス、氣をつけい！

ハンス(ゲノフェーファに)。あの晩はわれくは盲目ではなかつたのです。たゞその爲にわれくは、今朝はつんぽになつてゐるのですぞ！

ゴロ。お前が子供をもつて行け！

ゲノフェーファ(子供のところに走り行きて、子供を取る)。よくきいておけ、この子供にふれてはならぬ！ もし觸れでもしようものなら、わしは牝獅子のすることを、するであらうぞ！

ハンス。子供はわらつてゐる！

バルタザール。女の子か、それとも男の子かな？

ゴロ。早く參れ！ まさか忘れはしまいな？ 泉のそばたぞ！

ハンス。左手ですな。

ゴロ。右手ちや！ 何を今頃。右手だぞ！

ハンス。この男が場所は知つてゐます！

バルタザール。この女ひとにあるけようかしら！

ゴロ。泉のほとりちやぞ！

バルタザール。はい、分かつてゐます！

ハンス、バルタザール、ゲノフェーファ及び子供、退場。

ゴロ(笑ふ。それから水がめをつかむ)。あの女はこゝで水をたくさん貰つてゐた。あそこにも水がある。奥方と子供！ おれの最後の盃さかずきだ。おれは齒を喰ひしばつてゐ

る。それでもおれは飲むことが出来る！
（彼は水を飲む。それから）世界の靈！
おれがこの粘土のかめをやつたやうに、おれをもツバリとやつて呉れい！
いざ！ 森へ行かう！
（彼はたち去らうとする。）

第五場

カタリーナ（彼の行くてにふさがるや）おゝ、ゴロー！

ゴロー。はなして呉れ！

カタリーナ。哀憐を、哀憐をかけてくれい！

ゴロー。一體、だれに？

カタリーナ。そなたに！ わしに！ あの女に！

ゴロー。とめだてをするな！

カタリーナ。そんなに急いで、どこへ行くのぢや？

ゴロー。森へ行くのだ！

カタリーナ。そこでそなたは、何うしようとするのぢや？

ゴロー。わしは——あの女の死ぬのを見ようと思ふのだ！

カタリーナ。極悪人のする事ぢや。地獄のあつさをしらないのか！

ゴロー。戀の焔のやうに！

カタリーナ。そなたの馬に乗つて行つて、あの女と一緒に遁げてくれい。あの女がいふ事をきかぬやうなら、無理やりにもさういたすのぢや。

ゴロー。おさらばだ！

カタリーナ。そなたはさうしようとは思はぬのか？

ゴロー。そんな事は断じてやらぬ！

カタリーナ。えゝい、この人は呪はれて了へ！

ゴロー。呪咀にわしは渴えてゐるのだ。恐らく鷲がハンスめを、熊がバル

タザールめをひき裂くであらう。どん慾な狼はあの女と一緒に自分の獲物を分つであらう。そしてものおちする牝鹿がやつて来て、あの女の子に添乳するであらう。

カタリーナ。あの方には罪がないゆえ、そんな事が起らうかもしれぬぞ！

ゴロ。眞面目にそんな事を申すのか？ それならば、わしは行かねばならない——牝鹿と狼とをぶち殺す爲にだ！ (去る。)

カタリーナ。あの男を生んだ女は、今は墓場の中で、身をうらがへしたに違ひない。まくつらな夜に人殺しの叫びが聞えれば、外の人なら救ひに飛んで行くに、あの人はそれとはひきかへに殺しに飛んで行くのではないか。おゝ、おゝ！ わたしはもうたまらない。どこを見ても、眼のやうなものが、わたしをにらみつけてゐるのぢや！ その隅に座つてゐるのは、何者ぢや？ 扉のところ、わたしの出路をふさいでゐるものは、何者ぢや？ つきぬけ

よう！ つきぬけよう！ 右も左も見ろな！ そして井戸へ行かう！ (彼女はつきぬけ去る。)

第六場

ハンス、バルタザール、子供を抱けるゲノフェーフ。彼等のあとから、氣違ひのクラウスがこつそりとして来る。

ハンス。この邊でたしかおれは、牝鹿をうち止めたことがあつたぞ！

バルタザール。ひどくもの凄いとこだな！

ハンス。さうだ、この森はどこも物凄いとろこばかりだ。果てしもなくこの森はつづいてゐる。獵師でないものが、中へ這入り込まうなら、また元へ引きかへす路を見つけないうちに、たいてい飢死にしてうんだな。おれはいつか、藪の中で腐れかゝつた骸骨を見つけたことがある。これまでおれも、

あんな氣味の悪るいものを見たことはない。頭の肉は剥がれてゐるが、それでもところ／＼まだ毛がついてゐるんだ。腹のあたりには、蛇がうよ／＼してゐた。大きいのが小さいのが、ひと魂にかたまつてな――

バルタザール。ぞうつとするな！ とりわけ、こゝにゐるこの女が、やがてそんな風になると思ふとな。一寸おれは――

ハンス。何うしようといふのだ？

バルタザール。おれがこゝまで迂路をしたなあ、外でもないんだ。おれは、この女とはぐれることもあるまいから、序でに例の熊の穴ものぞいてみようと思つたのだ！

ハンス。山分けだぜ！

バルタザール(たち去り)。今日だけは、さういふ事にしよう！

ハンス(フアに)。お休みなされい！

ゲノフェーフ(樹の切株に)。

ハンス。この女は、もう死んででもゐるやうに、静かだ。おれは氣の毒でならねえい！

クラウス(子供に花をもつてゆく)。さあ、上げるよ！ 上げるよ！

バルタザール(歸り來る)。さあ、行かう、ハンス！ 穴の中にや狐が一匹ゐるだけだ！

ハンス。そんなら、この次にやつて來る熊は、朝飯にありつける譯だな。

バルタザール(フアに)。御立ちなされい！

ゲノフェーフ(起つと)。わたしはもう起つことが出來ない！

ハンス。此處でも彼處でも、おれの考へでは、一つだと思ふがな。何故またこの女を苦める必要があるのだらう！

クラウス(心配相な身振を以て)。あ、痛え！ あゝ、苦しい！

バルタザール。 また何うしたといふのだ、阿呆め？ (彼は空を見上げる) ウム、こりやまた恐ろしいこっだ！

ハンス(同じやうに見上げる)。 何だ？ おれには何も見えないがなあ！

バルタザール。 こゝへ来てみる。 何うだ？

ハンス。 神よ、われを哀れみ給へ！

バルタザール。 おれはもう空はみない。 さうすると、とつても恐ろしい氣持になるんだ！

ハンス。 太陽様(おてんどさま)が、自分の見たくないものを見てでもゐるやうに、憤然(ヒッ)として大地を見下ろしてゐなさるのだ。

バルタザール。 赤黒い色をしてゐるな！ あれを見てゐらや、おれには人は殺せない！

ハンス(十字を切る)。 アヴェ・マリア！

バルタザール。 何ういふ非道いことが、一體起こるんだらうな？

ハンス。 多分、世界が亡びるんだらうよ。

バルタザール(ハンスの腕をつかみ、向う側に彼を連れ行く)。 お前には何が見えた？

ハンス。 何にも見えやしねい！

バルタザール。 ウム、おれもさうなんだ。 だから、もう思ひ切つてやつて了はうではないか！

ハンス。 そりや何うしたってやつて了はなきやならないんだ。 この天徴がどんな事をほめかしてゐるにせよだ、聖なる神が律令(やまて)の一つを表(は)から消し去つたといふことには、決してならない筈だ。 さういふ譯だから、不義の密通をした女よ、おさらばだ、御機嫌よう！

バルタザール。 御機嫌よう！

クラウス(口眞似をする)。 御機嫌よう！

ハンス。嵐がおこるかもしれぬ。さうしたら榊の樹が枝をおれたちの上へ投げ落とすだらう！

バルタザール。かういふ考へが浮かんだがな。だれでも、出来る限りは、下手人になるまいといふ事だ。伯爵さまはゴロどのに押しつけられた。ゴロ殿はまた、お前とおれに押しつけられたのだ。ところでおれ達は——お前はかう思ふね、クラウスに押し付けようといふのだ。いづつならやるにはやつても、自分が何をやつたか、御存じないんだ。それで寝込んで了つて、眼が覺めりや、前の事はケロリと忘れて了うんだ。

ハンス。妙案だ。子供の事だけ考へても大助かりだ。何しろ、罪もないものを殺害するといふことは、恐ろしいことだからな。

バルタザール。クラウスには、何處を突けといふことを、指さして教へて置くんのだ。こいつは力は申分はない。それ、この間もこいつは狼を一匹しめ殺

したぢやないか。(ゲノフェー) さあ、御起ちなされい！ われ／＼はまだ行くところへ行つてゐないのでぞ。

ゲノフェー(だまつて起ち上が。りさまよるめく)。

ハンス(彼女を支へる)。それ見ろ、この女はもう歩るけないのだ。

バルタザール。それが辯疏(いひわけ)の種になるだらうか？

ハンス。おれたちは此處から泉のところへ行けばいゝ、そしてあの人に眼と髪の毛をもつていけば宜い。出来ないことはいつだつて辯疏になるんだ。

(ゲノフェー)。そなたがまだこの世での御望みがあるなら、有仰つて下されい。出来ることなら、かなへて進ぜます。男の一言でござるわ。

ゲノフェー。この可哀想な子供を、許して呉れい。

ハンス。それは成りませぬ。

ゲノフェー。お前達はこの子を殺さうといふのか、そしてこの子の血で眞

赤になつた手を以て、最後の審判をきりぬけようと思つてゐるのか？ 神がお前達に、その子は何ういふ罪を犯したのかと問はれたなら、お前達は何う答へるつもりなのか？

バルタザール。 われ／＼に尋ねないで下さい、われ／＼の主君に尋ねて下さい——かうわれ／＼は答へます。

ハンス。 そんな事はまあ、いゝやな。

バルタザール。 わしはこれから百まで数へる、数へて了つたら、やつつけるのだぜ。(彼は墓を掘りかへし始める、そして聲低く一、二、三以下を数へる。おりに／＼数がきこえる。)

ハンス。 そなたは外に心に思つておいでの事はないのですか？

ゲノフェーファ。 わたしの所夫そとが歸られたなら、わたしは殿からどんな非道いことをされたにしても、わたしは死ぬ前に、殿のすべての罪を許した、と申上げてくれい。

ハンス。 チェッ、この期に及んで殊勝げな事を申されるな。そんな事をきくと、わしはたまらなく腹が立つのです。わしはこの目で、ドラゴアがあなたの寢所ねどにゐるのを見たのぢや。あの男は何でまたそこにゐたのです？ あなたは所夫そとたる方に對して罪を犯しながら、その方の罪を許さうなどと、いはれるのか？ それこそ、鐵面皮と申すものですぞ！ そんな事よりは早く跪き、後悔の胸をたゞいて、あなたの汚らはしい罪行つみを懺悔なさい——さうすれば、殿がわしの口からそれをきこしめされたなら、殿の心もほろりとなつてあなたを御許しになるでありますぞ。

ゲノフェーファ。 お前方がドラゴアをみたときに、はじめてわたしは彼の姿に氣づいたのぢや！

ハンス。 何ですと！

ゲノフェーファ。 ゴーロがわたしに不義の戀をしたのぢや。そしていふまでも

なくその戀は斥けられた。それで奸計をたくんだのぢや。

ハンス。 ホウ、これはまた！

ゲノフェーファ。 年取つた、信心深い僕をば、あの男はたぶらかして、わたしの寢所に忍び込ませた――

ハンス(無作法に)。 何うしてあの人は、そんな事をやつたのだらう？

ゲノフェーファ。 そりやわたしには分からないのだ。

ハンス。 フム！ フム！ ことの事だ。あの方が來るとき言はれたことは！

(ゲノフェーファに。) あなたは、むごたらしい仕事をらくにして下されるのだ。

ハンス。 あなたのやり方はまるで蛇だ。蛇はふみつぶされても、なほ人を刺すものです！ 御禮を申し上げますぞ！ 何うか御願ひですが、出来るならば、御顔を赤らめて、わしの申すことを聽いて下さい。あなたがドラゴンを全く御覽にならなかつたなら、彼と些とも話しもなさらなかつたら、何うし

てあなたは、ゴローどのが彼をあなたの室へ遣されたといふことを、しるこ
とが出来るとせうか？ そしてあなたが彼と御話しになつたとすれば、何故
またわれわれは彼の隠れてゐるを見つけたのでせうか？

ゲノフェーファ。 ゴロー自身がわたしにさう申したのぢや。

ハンス。 うまく言ひぬけられますな。もうお黙りなされい！

バルタザール(數へ乍ら)。 百と！

ハンス(子供の方に手をやつて)。 御よこしなされ！

ゲノフェーファ(それを確平と抱いて)。 わたしを先に！

ハンス。 いふまでもありません。御渡しなされ！

ゲノフェーファ(子供を身におしつける)。 突いてくれい、そしてわたしが倒れたなら、この
子を取るが宜い！

ハンス。 おい、クラウス！

クラウス。へい！

ハンス(彼に剣を渡す)。これを取れ！

クラウス。へい！

ハンス。抜け！

クラウス(さうす)。へい！

ハンス(身振をして)。突くんだ！

クラウス(彼を睨みつめる)。

ハンス(烈し)。突くんだ！ 突くんだ！ おれが野猪を突くやうに！

クラウス。いやなこった！

ハンス(剣を取らうとする)。

クラウス(それを確乎もつて放さず、おびやかす)。汝ころすなかれ！

ハンス。それから何だ！

クラウス。汝——汝——(言ひ詰まる)

ハンス。密通する勿れ！(ゲノフェー)よくその事を覚えてゐなされい！ それをよこせ。(彼はクラウスより剣を揉ぎ取らうとする)

クラウス(彼を突き刺す)。

ハンス(倒れ乍ら)。地獄の悪魔め！(彼は死んで了ふ)

ゲノフェーファ。まあ、お前が？

クラウス(剣をふりかざして、バルタザールの方にふり向く)。

バルタザール。汝、殺す勿れ、ところで汝は人を殺すではないか？

ゲノフェーファ(二人の間に這入る)。止めいと申すに！ わたしはお前の生命を救つて

やつた——それでもお前はわたしを殺すのか？

バルタザール。わしは剣をもつてゐますか？ かうなつては、わしは伯爵の

御命令を果たすことは出来ないのです？ しかしこれから何うしようといふ

のです？ あなたは何してもお城へお歸りにはなれないのですぞ！

ゲノフェーフア。 あゝ、何うしても！ 城へかへれば、「死」よりもひどいものが、わたしを待つてゐるのぢや。天をわたしは證人として呼び上げる——わたしがこんな目に會ふのは、わたしが罪を犯した爲ではない。わたしが罪をこばんだがために、かうなつたのぢや。この子供を見てくれい。そしてこれが誰に似てゐるか、わしに言つて呉れい。

バルタザール。 殿様に生きうつしです。わしはとうからその事に氣が付いてゐたのです。しかしそれが何の役に立ちませうぞ？ 罪があるとか、罪がないとか——わしには何にも關係はないんだ。ゴーロどのが、或は伯爵どのが、わしがそなたを生かしておいたといふ事を聞かれたら、わしの頸はないんですぞ！

ゲノフェーフア。 わたしはお前に誓つていふが、わたしは決して此處に姿を見

せないであらう、それからわたしのこれをでの名も捨て、了うであらう。この荒れはてた山の中で、わたしはさびしいく洞穴をさがし出さう——獵師の犬さへ踏み迷つて行かないやうな洞穴を。わたしは大地から木の根をもらはう。殊勝な泉は親切にのみ物をわたしにくれるであらうし、寢床をばわたしは木の葉や苔で作るであらうに。

バルタザール。 それは、奥方、お考へ違ひです。そんな事にあなたは堪へられる方ではない！

ゲノフェーフア。 人間の先祖はさういふ風に生きてゐたのぢや。末代の人間として、さうしたからとて、死ぬやうな事もないであらう。

バルタザール。 野獸が来てあなたをひき裂いたなら？

ゲノフェーフア。 わたしは野獸をおそれはしない。神は鳥獸を御心のまゝに導くのぢや。尤も人間のかたくなな心情はさうはならぬのぢや。

バルタザール。あなたはもうお歩るきにはなれますまいに。

ゲノフェーファ。わたしが子供を死に運んでゆくには、あるけなかつた。しかし今はわたしは遁げる力が出て来たのちや——わたしはこの子を死から遠ざけようとするのちやもの。

バルタザール。それなら御出でなされい。しかしあなたの髪の毛をわしに下され！
(彼は彼女の髪の毛を切る。) さあ、急いでなされまし！

ゲノフェーファ。あゝ、森よ、わたしをかくまってくれ、永久にかくまつて呉れい！ 神がこの子を殺害者の刃からもぎ取つて下すつたとすれば、この子をうる死にさせる爲に、さうなつたのではない。
(彼女は藪の中に消え失せる。)

バルタザール(彼女を見送つて)。おれは肉をなが蟲から奪つて、狼にやつたやうなものだ！ おれが今晚、あの方は死んで冷くなつてると誓言しても、おれは偽誓をした事にはならぬであらう。あそこにハンスが血にまみれて横はつて

ゐる。此處に墓がある。おれはあの方のためにこれを掘つたのだ。ところがそれは彼奴(おいつ)の墓になつて了つた。とにかくこれからおれは、泉のそばまで行つて来よう。それから引き返して、朋輩をうめてやらう。
(クラウス) おい、クラウス！ 劍をよこせ！

クラウス(バルタザールに劍をわたす)。

バルタザール(クラウスにおし迫つて)。貴様はおれの事をばらしてはならぬぞ、悪黨め！

クラウス(逃げなから)。おゝ、痛い！ おゝ、痛い！

バルタザール(劍を抜きはなちて、彼のあとを急ぎ追つかける)。

第七場

森の他の場所。泉。芝生の腰掛。

ゴーロ(不安相にあちこちと歩るく)。天福(まひはひ)ではなく、恐怖の有りつたけをおれは、飲み乾

した。最高の後悔は、それ自身をば恩寵にまで導くところの路を取らない。
否！ 否！ 罪人の最後の権利に對して絶望しながら、悔悟そのものにまで
の権利に對して絶望しながら、その後悔は、呪咀にうち負け、呪咀を養成す
るのだ。後悔は、それが呪ふべき犯罪を、それが半分行はれた以上は、どん
づまりまで遂行することを、自分に強制するのだ。そして地獄の焰を、それ
を臆病にも涙をもつて打ち消すかほりに、自分で吹き起こすのだ。今はもう
おれは、いかなる憐憫もおれにはもはや届かないところに立つてるのだ。新し
い罪を犯したところで、内心の嫌悪をもう高めることも出来ないところに、
立つてゐるのだ。さういふ譯でおれは、最後の仕事をばやらすに置くのだ。
丁度大洋にたゞよつてある人間が、自分をうかべてゐた小舟を、足をもつて
突き退け、そして海中に自分をうづめるやうに、おれは今、生命をおれから
突き退け、おれといふものが、おれの犯罪の思想より、より多くの何物でも

なくなるやうな、暗い夜の中の最も暗い夜を、押し開かうとしてゐる。それ
がお前の最後なんだ。「反抗」よ！ お前は、お前を呪ふところの判決を、ふ
みにじつても差支へない。何故なら、お前はその判決を證明することが出来
るから、そしてかう告白すべきであらうからだ——神のおれに對するやり方
は當を得てゐた、そして神のみがひとり正當なんだ！と。しかし、「反抗」よ、
おれはそれだといつてお前を悪くいふのではない！ お前はおれといふも
のを、おれ自身に明かにして呉れた。おれは今、おれが何物であるかが分かつ
たのだ。それで何んな事がやつて来ようとも、神のおれに對するやり方は正當
だ。そして神のみがひとり正當なんだ！ や、あそこへやつて来たぞ！
(彼は中に這入る。しばらくして) まだか？ あの女が途中で氣絶したつたのか、それと
(彼は再び現れ出る。) ももしや——おれは何だか、もう立つてゐられぬやうだ！
(彼は座る。) そんな事はありえないことだ。
(彼は呼ぶ。) ハンス！ バルタザール！ 此處にゐるぞ！

聲がきこえぬやうだ。ひどい風だからな。おれは眼を閉ぢよう(彼はさうする)、そして、自分の胸の中に最後の戦慄を呼び起こそうとする悪魔のみが案出するやうな、もの凄いやうな作り話を、おれに話してきかせよう。(訝えぬ聲で、間) おれは、あの僕たちが路をふみ迷つたのだ、そしておれが心配して彼等の到着を待つてゐる間に、彼等は、あら／＼しくかつ鈍ましくも屠殺者の役目をしとげ、そしておれが眼を開くと、血みどろになつて、おれの前に立つてると、考へてみよう。

のろ／＼とバルタザールがやつて来る。ゴローが眼をひらくと、彼は鮮血のしたゝる剣をもつたバルタザールを見るのである。

第八場

ゴロー(とび上がる。バルタザールの方に向つてあるき乍ら)。そちらはあの女を遁がしたのか？

バルタザール。御心配は御無用です！ これは(彼は剣をあげる) 血ではないでせうか？ これは(彼は髪の毛をあげる) あの方の髪の毛ではないでせうか？

ゴロー(顔を蔽ふ)。さうだ！

バルタザール。それならばわしを御ほめ下さい！

ゴロー。のら狗め、おれは先刻何と申した——

バルタザール。われ／＼は、力なくよろめく女を鞭でもつて追ひたてなければならなかつたでせうか——あの女が聲も立てず、生氣を失つてうち倒れて了うまで？ さうすれだわれ／＼は死んだ死骸をぶつ斬ることにはなつたでせう、しかし生きてるからだに死刑の執行をする譯には行かなかつたでせうに！

ゴロー(最高の苦痛に堪へがれ。腰掛に座る)。

バルタザール(ひとり)。あの女の言はれたことは、もしかすると？ おれには

何うもほんとうらしく思へたんだが！ 裁判官といふものは、剣がもちかへされたとき、こんな様子をするものぢやないがな。おれはこの人を試してみ^{ため}る。ほんとの事を探り出したら、おれはそれで旨い汁を吸ふとしよう。^(聲高) それにしてもあの方は、お氣の毒でしたなあ！

ゴロー。 業洒らし奴！ だまれ——今始めてそんな事を感じるとは！

バルタザール。 わしが——^(彼は頭を斬る身振をする)かうやりましたとき、それを感じましたなら。しかしあの方は、そんな風な死に方はなさらなかったのです！

ゴロー。 そんな風な死に方をしなかつた、と！

バルタザール。 わしが剣を抜き放つて、そしてあの女が、こんな場合はよく人がやるやうに、頭を恐る／＼^た低れる代りに、頭をあげたときに、わしが慄然としたのは、申すまでもありません。^(彼はのろ／＼とそしてうっ)そしてこりやあなたに白状しなければならぬのですが、あの方がドラゴ—やあなた

のことをいろ／＼言はれたときには、わしや變な氣持になつたのです。あなたはお顔が青くなられたやうですな。ところで——ところで——わしは、ハンスのやうにグラつきはしなかつたのです。

ゴロー。 ハンスが？

バルタザール^(一歩あとすき)。 彼は、「ゴローどのは、悪漢だ！」と、大きな聲で叶んだのです。

ゴロー^(うなづ)。

バルタザール。 無禮の段は御許し下されい。それから彼は彼の女の方にふり向いて、「私はあなたを守護します！」といつたのです。

ゴロー。 それでお前は？

バルタザール。 さうです。わしは！ わしは、あなたが御想像になれないやうな事を行つたのです。あなたはわしをさう頼みにはしてをられなかつた！

—そりやわしには分かつてゐたのです。それでわしはこの機會を利用して、わしが信賴出来る男だといふ事を、あなたに御覽に入れようと思つたのです。わしはハンスに、「貴様は嘘つきだ！」といつて、彼を刺し殺しました。ところがクラウメが、氣違ひのクラウスめが、ウツカリしてゐる内に後ろから、わしの持つてる劍を揉ぎ取りながら、わしに迫つて來るのです。それでわしには鋤のほかには、防禦の道具は残つてゐなかつたのです。この獸のやうな人間をぶち殺すことは、なか／＼骨が折れましたが、とにかくとう／＼やつつけて了つたのです。わしはあの怪物の腹をぶつ劈いてやつたのです。いかにです。熱心な忠勤ぶりではないでせうか？ わしはあなたの死刑執行人となる前に、二重の殺人者となつたのです。御禮を言はれても宜い事のやうですかな？

ゴロ。 おれのやうに、消えて失せろ。あの女は、あの女が生んだ子供の

やうに、罪がなかつたのだ。

バルタザール(ひとり)。 さては本音をふいたな！(あつま)それをわしは知つてるのだ！

ゴロ。 何ぢや！

バルタザール。 わしがあの女の頭をきり落とす前に、わしはそれを知つてゐたのです。あの人は啞ではなかつた、そしてわしは聾ではなかつたのです。

ゴロ(起ち上がらうとするが、何うする事も出来な) さう分かつても貴様は？
(いやうな憤怒が彼を腰掛にしぼりつける。)

バルタザール。 そりあ、男といふものは、さういふものです。わしはあなたに、あの方をかたづけると、立派に誓ひました。そしてわしは正直に誓約を守つたのです。しかしわしは決して、あの方がわしに打ち明けられたことを殿様に申上げないとは、お約束はしなかつた。それで死なむとする女の斷末魔の叫びによつてその睡眠から呼び覺まされたわしの良心は、今やわしに—

ゴロ(飛び上がりさま、狂へるやうに)。貴様はあの女ひとが罪がないといふ事をしつてゐた、

ところがそれでも——？ さあ、生命を守れ、下郎め！ 貴様は劍をもつてゐる！ おれは貴様の面目を引き立て、つかはす！ それを使へ！(彼は彼の獵刀を抜きはなつ。) さあ、来い！ おれにはこの小刀があるだけだ！ さあ、来い！

バルタザール(恐ろしく)。あの女ひとは——その——

ゴロ。罪がないのだ！

バルタザール。さあ——しかし——

ゴロ。腰抜けめ！ 卑怯者め！ 貴様は女でないと、劍をぬきはなつことが出来ないのか？

バルタザール(劍を投げ捨て、逃げ)。

ゴロ。くたばりをれい！(彼はバルタザールを刺す。)

バルタザール(藪の中でうち倒れて死ぬ)。

ゴロ。おれがそれをおれ自身の手を以て行つたであらうなら、おれはそれを忍びうるであらう。そしておれの行爲の中に、大悪魔サタンが、天からつき落ちながら創造したところの地獄の中に、さびしく、近よりがたく住んでるやうに、留つてゐる事が出来ようだ。ところがもう今は！(天に向つて切齒) おい、おい！ おれは今の言葉を撤回するぞ！ そりやほんとおれの心持ちやないんだ！

第九場

カスパール(息を切つて疾走して来る)。あそこに彼がある！ ありがたっ！

ジークフリート(カスパールのあとから来る。氣のむけた。やうな聲で、しびしび落ちて着いて)。もうやりおほせたのか？

ゴロ。仰せの通りです！

カスバール(ひとり)。もう駄目だ！　もう間に合はぬ！　さあ、永久に沈黙

302

して呉れ、おれの疑念よ！　おれはかうなつては、何もとり做しやうがない、たゞ殿様の構間をひどくすることとが出来ただけだ。おれは殿に苦悶くもんを興へることを控へよう。(ゴロロに、ひそかに)　かういふ事があつたが、そなたは何う考へる？　伯爵が城の門内に馬を乗り入れたときに、そなたの乳母が氣が狂つたやうに井戸のほとりに立つてゐたが、急に走つて来て殿の御乗馬の前に身を投げたのぢや。それであの女の頭は馬の眞鍮の蹄でもつてわられて了うた、そして腦みそが血があたりに散亂した。あの女は死んだ者として廣間へ荷ぎこまれて行つたのぢや。

ゴロロ(冷々)。さうか！

カスバール。何故あの女はあんな事をやつたのでせう？

ゴロロ(ジークフリートを指して)。わしはそれをあの方に言はう。

カスバール。そなたが何んな事を白状しなきゃならんにしろ、それは胸におさめてお置きなさい！　死んだ女ひとをそなたは呼び生かすことは出来ないのだ。せめて生きてる人をいたはつて下されい！

ゴロロ。わしは、そなたがわしに一つの事を誓ふなら、さうするであらう。

カスバール。何ういふ事を？

ゴロロ。わしが殿に大罪を懺悔したら、殿が奥方の復讐をされると同じやうに、そなたがこのわしに、あの方の復讐をして上げるといふ事ぢや。

カスバール。わしはそなたにそれを誓言する！

ジークフリート。ゴロロ！

ゴロロ。伯爵どの！

ジークフリート。城内で一人の畫家が、わしの前へ出て来て、わしに一つの肖像畫すがたゑをさし出すのぢや。その男が、わしの爲に描かれた奥の畫像を奥に渡

303

したときに、奥がそれをその畫家に誂へたといふ事なんぢや。

ゴロ。 さういふ事がありました。

ジークフリート。 不義の相手ではなく、わしの姿がその繪にかゝれてゐるのだ。

ゴロ。 奥方があの日に畫家に言はれた言葉は、今もなほわしの心に音楽のやうに響いてゐる。奥方は――

カスパール(心配相に彼の言葉をさへぎ)。奥方のありし日の事を考へるのは、御止

めなされ。たゞ奥方の今の事を御考へなされい！(彼は死んでゐるバルタザールを認める)そこに横

はつてゐるには、何者ぢや？

ゴロ。 私はあなたの御家來をば斬り倒したのです。私は自由なる人間です！ どうかつぎなひをして下さい！

カスパール。 それは然るべき事ぢや！ こゝに劍が一つある！(彼は劍をとり上げる)殿

の御劍です！

ジークフリート(しづか)。

わしは、人性の奥そこを見抜いてからは、決してもう一人の人間を罰しようとは思はぬ。奥も、もしまだ生きてゐたなら、死なせはしないであらうに。一つの言葉が何だ？ 一つの息吹のまた息吹に過ぎない！ 奥は世界の美しい時計盤であつた。そして彼女の罪は黒い針であつたのだ――その針は音もなく、かくれた推進機によつて押し進められ、そしてすばやく正午から、回轉の終結なる眞夜中をめぐり進んで行くのだ。悲しいかな、わしは輝ける水晶をぶちこわして了つた――時計の針がわしには餘りに速かに動き過ぎるやうに思へたばかりに。さて今は何時になつてるのか、誰かわしに告げて呉れる者があるか？(彼はゴロの手をつかむ)さういふ譯なんだ、わしの友達！ そちも奥を呪はんで呉れ！(バルタザールを指して)あの可哀想な愚か者は、何をしたといふのだ――そちが今日の晝飯を彼に食べさせないや

うにして了つたのは？

ゴロ。 彼が奥方を殺した男なのです。

ジークフリート。 彼は、彼を一度も侮辱もしなかつたあれほどの美しい女を
惨殺する事が出来たのたか？ 残酷な行爲だ！ 彼女の死んだのは當然だ。
しかしかゝる女を冷酷にも殺したあの男の死んだのは、一層當然だ。そちが
彼を刺し殺したのは、至當であつたぞ！ (彼はゴロの前に現れ出
て彼の顔を視る) 可哀想にそち
を見ると、わしは氣の毒になるぞ！ わしが軍さに出で立つたときは、そち
はまあ子供であつた。そちは今は何だ？ そちは、饗宴へ行くみちすがら、
人につかまへられて、死刑執行人の役目を強ひられたといふ男のやうな者ぢ
や。その男の着物は血みどろになつた。そして眞ッ青な顔をした恐ろしい姿
として、彼は歡樂の家に這入つて行つた。さうすると自分自らも幽霊であ
つたが、あたりにゐるものもみんな幽霊になつてゐたといふ事ぢや。(問の)

306

わしはお前を責める。かゝる行爲を命ずる者は、また自分の手を以てそれを
遂行しなければならぬのだ。神がそれに對する力を否んだ男には、神は、
その判決を斥けるといふことを、示してゐるのだ！

ゴロ(ひとりにて)。 わしはもう堪らない！

ジークフリート。 遠い旅に出かけるがいゝ！ 世間は廣くかつ華やかぢや。

恐らくそちも紛れることが出来るであらう！

ゴロ。 おひまがいたゞけるのですか！

ジークフリート。 宜しいとも！

ゴロ。 私はもう今日中に出かけます！

ジークフリート。 そちが歸つて來たときには、そちは宮中伯になるのだ。わ
しは、後嗣がもうないから、そちにわしの財産と領地を譲るであらう、そし
て皇帝の恩惠によつて、爵位をも譲るであらうぞ！ (彼はしづかに
退場する。)

307

ゴロ(彼を見送つて)。おさらば、もいふまい！　あの方の口からさういふ御挨拶をかへされるのが心苦しいからちや！(ジークフリートの姿が見えなくなつたときに)　カスバール！

カスバール(ジークフリートの剣をなほ持つてゐた彼は、それを以てゴロに追つて来る)。何ちや！

ゴロ。それはいけない！　それが何ちや！　復讐の靈は、別種の犠牲を要求するのだ——この世でたゞ一人の人間が堪へ忍び得るやうな苦痛くるしみといふ苦痛を、そして自ごのづから來ないかのやうに來る「死」を。(彼は前面に出て、手を高める)天の面前でおれは今、裁判官としての手をさし上げる。おれは原告として同時に被告として立つてゐるのだ。その方は道具ちや。執行者は森からひき出される。犯罪は明白であるぞ——これがおれの判決だ——あまりに多くあの女ひとにのみそゝがれ、そして主君のことをあまりに注視しなかつたところの、この眼はくり抜かれなければならないのだ。おれの偽りの心臓があの方の女の姿をぬすみ取つたときに、すぐにそれをも突き通さなかつたところの、この腐甲斐ない

腕に、おれは兩眼に對して刑罰を遂行する事を、命令する！(カスバール)それ

が濟んだら、そなたは盲人を森の奥へ連れ行き、彼の衣を剥ぎ取り、そして素裸にして彼を樾の樹にくゝりつけて呉れ。さうすれば野猪や怒れる熊や、下から突き刺すところの蛇や、空の高みから突き落ちて來る鷲が、それとく齒や爪を以て彼の肉を喰ひ裂くであらう。その樹が風に揺ゆぶられて、飢えた男の上に、樾の實の一つを投げ落とすときに、彼はそれを口を以て受けてはならない。しかし彼が彼の舌を食はうとするなら、それは彼に許されてあれ。さあ、仕事へとりかゝらう！(彼は彼の獵刀を抜き、森の中にはいり、人々から見えぬところで、兩眼をくり抜く)

カスバール(彼に近寄り)。あ、血だらけになつてゐる！　兩眼が！

ゴロ(手さぐり)。さあ、俺を導いて呉れ、そしてそなたが城に歸つたなら、おれは馬にまたがり、手に鷹をもつて、いづくともしれず馳けて行つたと、傳へて呉れ。

カスパール(ひとり)。おれはすぐに彼を殺さう！

(カスパールが剣をふりかざすや否や、速かに幕が下りる。)

後のゲノフェーファ

第一幕

深き森の中。一つの洞穴。

ゲノフェーファ(洞穴から出て来る)。寒い冬が過ぎ去つた。森はまた色づいて来る。風は温かになつて来る。百千の花は咲き匂つて来る。春の力は大きい。こんなわたしまでも喜ばずにはゐられないほど、そんなに大きい！ もうあれから七年目ぢや！ ても、人間といふ者は何と不思議なものであらう！ 人間は幸福なときには何事にもこらへ得ない。ところが困つてるときには、何でも我慢が出来るとだ。三つの要素があれば、人間は澤山ぢや。地と空氣と水だけ

で、人間はすごせる者ぢや。かうなれば火ももういらなくなる。わたしもこゝでこれまで一度も火をもつたことがない、それでもわたしの子供とかうやつと一緒に生きてゐる。あゝ！ それにあの可哀相な子供よ！ あの子はどんなに呼吸づかひをよろこんでゐることであらう——あの子には外には何にもないのだもの！ あの子は今日は始終、出たり這入つたり、かけ廻つてゐた。そしてわたしが、「何故、坊はそんなに出かけるの？」と尋ねたら、あの子は、「なあに！ 中にはいつると寒くなるんですもの。外へ出ると太陽があたつて、そりや温かですよ！ といふのだ。今あの子は木の根をさがしてゐる、そして久しぶりの喜びにひたつてゐる。春になるとわけもなくそれを引き抜くことが出来るからぢや。もういちごも大方出たことであらう！

(彼女は合掌)
おゝ神よ、私はこんなに澤山の幸福をあなたに感謝いたします！
そしてあなたが、全世界で只の一人でも不足を言はない様にさせる爲には、

だれでも夢に、この子供を見せてやつて下さい！

第二場

シメルツェンライヒ(息せき切つて)。あ、お母様！ お母様！

ゲノフェーフ。氣を落ちつけて！ 何うしたといふのです？

(遠方に狩獵の喇叭)

ゲノフェーフ。あれ、まあ！

シメルツェンライヒ。あれは屹度、悪魔です！ 獣といふ獣が遁げて行きます。鳥といふ鳥が飛び去つて行くんですよ、お母様！ 一匹の熊がわたしのすぐ側を走つて行きました。それから、これまで森の中で見かけたことのない、尖がつた角をもつた獣も、遁げて行きました。私は膝がブル／＼ふるえ込んです！ かゝえて下さい。さうしないとわたしは倒れてしまひます！

ゲノフェーフア(彼の上に身をこ)。坊や、お前はお前のお父様——天のお父様がお前を守つて下さるといふことを、しつてゐるでせう！ 野牛と熊とがいつかこゝで戦つたときにも、坊やは泣いて、もう死ぬんだと思つたのね。それでも神様がその獸たちをこゝまで追ひたてゝ下すつたのは、たゞわたし達の着る物を御心配になつた爲なんです。獸はどつちもお互に死んで了つたのだ。そして牛の皮はお前の着ものになり、熊の皮はわたしのものになつたのです。今日も何んな事になるか、分かりやしない。それですからそんなに恐こがらないでね。そして「主の祈禱」を御いのりなさい！

シメルツェンライヒ(聲をたてず。に祈る)。

ゲノフェーフア。あれは何ぢや！ 狩獵の喇叭だ！ この森で！

シメルツェンライヒ。お母様、きかせて頂戴！ わたしに悪るい事をしたといふ人は、誰ですの？

これまですゐぶん永くわたしは、御祈禱の時には、

わたしはその人の罪を許したいのですと、神様に約束したんですよ！ それからわたしはほんとに心からさうしたいのです。だけれどわたしは、その人を知らないんですね！

(狩獵の喇叭が全く近くに聞える。)

ゲノフェーフア。御覽！ 御覽なさい！ お前の乳母の牝鹿が、可哀さうに！

まあ、何といふもの狂はしい、もの怖ぢした眼つきをしてゐることだらう！ あれは狩りたてられたのだ。こゝへ御はいり、殊勝な獸けものよ。それ洞穴にはいつて了つた。さあ、お前も御出で。だあれも鹿を追つかけてさへ來なければよいが！ (シメルツェンライヒと共に洞穴の中に這入る。)

第三場

シークフリート(狩服をきて現れる)。牝鹿はどこに這入つたのだ？

カスパール(彼について)。まるで大地が口でも開いたかのやうに、おなくなつて了ひました。

ジークフリート。大地は決して口を開く事はない。然しあの鹿がどこへ隠れようと構はない。何もあの鹿に限つた事はない、外の奴を狩るとしよう！

カスパール。何うでも構はぬ？ そりやいけません、いけません、殿さま！ 獵師といふものは、そんな事を申すものでせうか？ 獵師にとつては世界にはたつた一匹の獸が——彼が丁度狩り取らうとしてゐる獸がゐるだけなのです！ それを倒さないうちは、外の獸などは、彼の眼中にないのです！

ジークフリート。そりやさうだらう。だれでも、お前のやうな人間が、毎朝々々やつて来て、これは御入用ぢやありませんかと尋ねたなら、その緑色の上衣をやつぱり着ることだらう。しかし心情こころづかひはさうはいかぬ——心情は強ひられる譯に行かないのだ。そしてわたしは、少しばかりの葡萄酒を飲むとき、

何故またあの獨體から飲むことが好きなのかを、知つてゐるのだ。わたしは今度はお前の言ふことをきいた——お前がわしの氣を引き立てる爲に、荒い事の好きな従兄弟たちをわしの城に招いたので、かういふ風に狩獵にもみんなと出かけた譯なのだ。それはわしがお前の手段を上策と考へた譯ぢやない。たゞわしは、もうわしの心を癒すいかなる手段もないといふ事を、侍醫に見せつけてやりたい爲なんだ——わしはこらへてゐる。わしは呪はない。それ以上の何ういふ事をわしにせよといふのだ？ わしの感じ——それはしかしわしには何うすることも出来ないのだ。基督すら十字架の上でたゞ頭をうなだれ給うただけだ。彼の微笑のかけが何處に求めえられたらうか？ あゝ、そちがわしが何んな心持でゐるかを知りえたなら、そちは、わしがまだ飲み食ひをしてゐるといふ事は、一つの勇しい仕事だと、いふであらうに！ それはい、彼女に對する悲哀ばかりではない——その悲哀をわしは黒死病ペストや天

刑病のやうにひし隠しにしてゐる。それを押し殺すにはわしの心はあまりに弱いのでな——いや、わしは彼女にあんまり非道いことをしたんぢないかといふ悩みが、わしをさいなむのだ。ほんとに總ての事が今日までも有耶無耶なのだ。カスバールよ、わしは恐ろしく急ぎ過ぎたのだ！

カスバール。それは確かにさうです！

ジークフリート。 あんな事を命令するものは、また身自らそれを遂行すべきものだ。神からそれに對する力をこばまれた人には、神はその判決を斥けるといふ事を、示してゐるのだ。わしはその事をゴローに押しつけた。おゝ、それがわしに對して恐ろしくも報られたのだ！ わしが彼女が死に行く路において彼女を見たであらうなら、總てが今とは違つてゐよう！ 彼女の恐怖、彼女の戦慄はわしの勇氣を高めたかもしれん。しかし彼女が勇敢に死んで行つたら、それはわしの心のうちに戦慄を呼び覺ましたかもしれん。と

にかく何んな事になつたにしろ、わしの胸は今、平和を持つことが出来たでらうに！ ところが今は——あゝ、死人といふものはすべて、自分はそれと知らないが、人の血を吸ひ取る鬼だ、そして彼を愛する者の心臓の血を吸ひつくすのだ。暗い噴墓おんぼからのぼつて来る亡靈は、どれでもそれが姿を現す前に、紅の血をしたゝか飲んでゐるにちがひないのだ。そして彼女は——おゝわしの見る夢は！ それに晝間でも、彼女の姿はいつもわしの眼の前にちらつくのだ！ わしの周圍の世界がぼんやりと消えるときも、わしが祭壇のそばで神の前に立つてるときも、それからわしが開いてゐる墓をのぞく時も、彼女の姿は、なか／＼たち退のちひかうとしないのだ。さうでなければわしはもう——カスバールよ、辛棒してくれい。もう近いうちに、終結が來よう！ そのときはそちも——

カスバール。 ゆつくり寝られよう、と有仰るのですか？——や、鹿が一匹！

ジークフリート。ゴローは一體、何處に隠れてゐるのだらう！ わしはいつも、彼が歸つて来て、彼女のことをさまざまに物語つて呉れ、ば宜いがと、心頼みをしてゐるのだ。その話しをきけば、元より彼女の罪を全く許すまでにはたち至らなくとも、それでも全然呪咀するほどの事はき、出されぬであらう。さうすれば冥福を得る期望が、まだわしにはある譯だ！

カスバール。ゴローは歸つては參らんでせう！

ジークフリート。彼が不慮の災難にでも遭つた、と申すのか？

カスバール。そりや、たしかに、あの人はもう生きてはをりません！

ジークフリート。幸ひで暮らしてゐてくれ、ば宜いが！

カスバール。さう有仰つても差支へはありますまい！

ジークフリート。何ぢやと？

カスバール。私は最終審判を受ける幸福が、彼に與へられ、ば宜いと、思つ

てゐるのです！ その日ももう遠くないやうに思はれます！

ジークフリート。何うしてそちは、そんな事を申すのだ？

カスバール。いや、なに！ 魔女どもがわれとわが身を焼く時には、彼は扉口に立つてるに違ひありません——と、ところで昨日の女は自分で焼け死んだのです！

ジークフリート。恐ろしい前兆ぢやな、それは！

カスバール。彼女は殿の御側へ參らうとして、それがうまく行かつたかつたので——私は、彼女が非常に嘆願したのですが、彼女を追ひ返したのです。

ジークフリート。わしは充分の施しをやらなかつたらうか？

カスバール。そりやもう充分でした。たゞあの女は金をもらひに来たのではなくありません。また麵麩や葡萄酒をもらひに来たのでもありません。彼女は瀝青や硫黄や、大麻や粗麻をもらひに參つたのです。そして外の者が彼女にそ

れをやらなかつたので——もつとも私はあの女にこの施し物を、蠟燭も添へてやりたかつたのです。何しろ前から知つてる女でしたものな——やむなく彼女は森の中へ走つて行きました、そして小枝を拾ひあつめました。それから彼女はそれで以て火刑の薪を積み上げて、その中に這ひ込み、二つの燧石で火を切り出したのです。枯葉に火がつかしました。これをその女は、一分はおろか一秒をも争ふかのやうに、大急ぎにあわてふためいてやつたのです！

ジークフリート。それでだれもそれを、止めたてをしなかつたのか？

カスバル。いや、いや。天にかゝつてゐた黒い大きな雨雲さへ、それをだまつてみてゐました。どの雲もかすかな水滴をすら洩らさなかつたのです。

あとでは夕立が來たのですが！——殿様、その女は、神が炎々と燃える煖爐の中で試練した、かの聖者達のはちがつた歌を歌つたのです！元より彼女は呪ひはしませんでした。彼女は罪を懺悔しました。それも非常に眞面目

にやつたのです。何故なら火焔の熱の眞ん中にゐながら、彼女の齒は、心の惱に堪へ兼ねてか、身内の寒さに、ガタ／＼と言つてゐましたからな。しかし彼女の言ひ出したことは、彼女が二言三言いつたのちにもう、私が見物人をおひのけたほどの事でした。ところが彼女はかう叫びました、そなたはここにゐる人達を追ひ拂ふのですね？ そりや何の役にも立ちますまい。森の鳥がわしのいふ事を聴いてゐます。そしてどの鳥でも話しはじめますぞ、もしもその鳥が——(彼は言葉をとぎらす)何を苦んでわしはまだ、それを抑えてゐようとするのだ？ あの女のいふ事は尤もだ。わしにもさういふ感じがするのだ。わしがそれを話さなければ、つぐみのやつでもそれを喋舌つて了ふだらう。もうだまつてゐるわけに行かない！ それにわしは、何うしても追ひのけるわけに行かない、悩みがあるのだ！——(彼は語りつ)もしもその鳥が伯爵を見るときは！

ジークフリート。 カスバール！

カスバール。 さうです、殿様！ 彼女はそれからこの私に、ある人殺しの罪を歸しました——軽い重荷ぢやありませんか、私の七十年のながい年月に對しては？——つまり私はかつて、その女からけしかけられて、信心深い僕を殺したのです！

ジークフリート。 えーッ！

カスバール。 あなたに對しては、私はあなたに御願ひいたします——もしもあなたが天國へ御いでになつて、あなたの奥方が神の右手に御いでになるのを御覽になつたら、永久の歡喜の廣間は、不義をした女達にも開かれてゐると御考へにならないやうに——さあ、先へ参りませう！ 御出でなされ！ 獣どもがわれ／＼を馬鹿にしてゐます。あちらを御覽なされい！

ジークフリート。 いや、一寸一言！^{ひとこと} その女はストラブルクに行つたことが

あるのか？

カスバール。 もう御尋ねにならないで下さい！

ジークフリート。 えゝ、何ぢや！ そちは、「否」と言はないのだな？

カスバール。 あの牝鹿はそこにゐるのではないでせうか？ 斑のある頸がさつき見えたやうでしたが！ また見えなくなりました！

ジークフリート（彼のあとからついでに行く）。 そちは遁げるのだな！

カスバール。 こりや一體、何だらう？（彼は洞穴を）^{（彼は洞穴を）} 洞穴だな！ これで先刻の不思議も分つたやうだな！

ジークフリート。 話してくれ、カスバール、いつてくれ！ 死かそれとも生か？ さあ、早く！

カスバール。 さあ、何うしても言はねばなりませんなら！ それならばかういふ譯でございます。悪魔があなたを翻弄したのです。あなたは白を黒と考

へ、そして黒を白と考へたのです！

ジークフリート。 それでもゴローは！

カスパール。 その事はすでに申し上げなかつたでせうか？ あなたは黒を白と考へられたのです。 つまりあの男は黒かつたのです。

ジークフリート。 ゴローが！ (彼は一本の樹に
つかまる。)

カスパール。 あなたを欺いたのです！

ジークフリート。 しかとさやうか？ 彼が——彼が——

カスパール。 さうなんです！ 彼はあんまり若うございました、そしてあの方は——

ジークフリート。 さういふ事なら——(彼は樹から
斬り捨てるぞ！) (彼は拳を
めて)

(を下す) カスパール、きくが宜い、彼が何處にゐようと、——愛人の腕に抱かれてゐようが、手に盃をもつて、友達の團欒にあらうとも、それから神壇の

ほとりにゐようとも、今といふ今、彼はうち倒れて、もう二度と立ち上がることは出来ないのだ！

カスパール。 彼はそんな事にはなりません！ もうそれはやつて了つたのです！

ジークフリート。 おゝ、ゲノフェーファ！ ゲノフェーファ！

カスパール (恐怖を以て洞穴
から離れる)。「あゝ」といふ聲が山の中からきこえました。 悲嘆の聲が。 この洞穴は地獄に通じてゐるのです！

ジークフリート。 おゝ。 火焰がわしをめぐけてもえて来ればいゝが！ (彼は
洞穴
に這入らうとする。しか
しすぐに再び馳け出る。) 聖なる神！

カスパール (十字を
切る)。 あらゆる良き精霊は——

第四場

ゲノフェーファ(入口にたち。現れる)。主なる神を賞めたゝえてゐます！ わたくしは幽霊ではありませんぞ！

シメルツェンライヒ(姿を見せ。すに)。お母様、お母様、出てはいけませんよ！

カスバール。お母さんなんだな！ 女だ！ 可哀想な女だ！ (そばへよ) こんな荒涼とした山の中に！

ジークフリート。それは女か？ それならわしは彼女をしてわしの頭を踏み碎かshめるために、彼女の前に跪かなければならない！

ゲノフェーファ。私のジークフリート、あなたの心臓こころはあなたに何かを告げませんか？ あなたの眼はそりやそなたに何も申しますまい。それでもあなたの心臓は——(腕をひろげて彼に近よる) 私です！

ジークフリート(防ぎ止める。やうに)。いや、いや！ たとへわしが永劫かけて地獄の中で、わしの犯した罪のつぐなひをしたにしろ、やはりわしは、いや！ と言

ふであらう！

ゲノフェーファ。あなたは私を支へて下さらないのですか？ あなたは御眼が見えませんか？ 私はもう倒れます！ (彼女は彼を抱く) 何うか私を支へて下さい！

御別れしてからといふものは、あなたは大方、接吻をなすつたことがないでせう！ すゐぶん長い年月でございました！ あなたの妻は澤山接吻をしました！ 御いでなさい、シメルツェンライヒ！ さあ、わたし達は二人でこの子に接吻させよう！ 最も、御別れするとき、出来なかつた最後の接吻を、今受けて下さい！ (彼女は彼を接吻する) あゝ、これは何うした事か！ (彼女はよるめく) 私を支へて下され！

シメルツェンライヒ(恐るゝ現れて来る)。お母様が死ぬのだ！ さあ、何うしよう！ わたしは知つてるのだ！ いつかお母様はこんなにおなりになつた！

ゲノフェーファ(再び氣を回。復して)。そのときわたしは死にましたか？——お父様、あ

あなたの子息です！

ジークフリート。 勿體ない！ 勿體ない！ (彼はあとへ) わしには、何も受け
とれない！

ゲノフェーファ。 あなたはあなたの子供を接吻しようとはなさらぬのか？ も
う七年のあひだ、この子はそれを待つてゐました。それでもまだあなたはそ
れを、この子に御拒みになるのですか？

ジークフリート。 そなたのいふ事は尤もぢや！ わしを殺してくれい！

ゲノフェーファ。 さあ、シユメルツェンライヒ、そなたは、そなたのものを、無
理じひにも取るが宜い！ そなたは攀ぢのぼることが出来るでせう！ さあ
のぼつて行つて、お父様に接吻なさい！

シユメルツェンライヒ (ゲノフェーファの影に身をかくす)。

ジークフリート。 愛らしい子よ、そなたは遠慮してゐるのか？ そなたは、

何のため、そなたは父を接吻しなければならぬのかを、不思議がるであら
う。さうだ、そなたの着てゐるものを見るが、さうするとそなたにはそ
の譯が分かる筈だ！ そなたに毛皮などをさせるやうにした人間、そなたを
洞穴に住むやうにさせ、そして熊にやるやうな食事をそなたに與へるやうに
した人間は、當然そなたにさう考へられねばならないんだ！

ゲノフェーファ。 そんな事はありません、わたしのジークフリート！ 神がわ
たし達二人をあなたの爲に生き存へさせておいたことを、わたしと一緒に神
に感謝なさいまし！ わたし達はひどい生活をして参りました。それでもわ
たし達は生きて來たのです、そして今になつて始めて、何の爲だつたか、分
かるのです！ あなたの子供は、枯葉や草の苔の床より、もつと柔かな寢床
があり、木の根よりもつとおいしい食物があるといふことを、知らずに育
つて來たのです。これからはこの子もそんな事が分かるやうになりませう！

ジークフリート(カスバールに誓をわたり)。カスバール、これを取れ！ それからそちの喇叭を吹いて呉れ！

ゲノフェーア。何をお考へになりましたの、あなたは？

ジークフリート。わしは、だれでも八里はなれた荒野に住んで、自分の両手より外の何物ももたないときは、何んなものか知らずにはゐられないのだ。わしは自分でそれをやつて見よう！ (カスバールに)あつちへ聞えるやうに吹いて呉れ！

カスバール(吹く。遠方から答への。喇叭がきこえる)。

ジークフリート。距離を計つてみたのぢや！ 聖なる人よ、そなたは城へかへつて下さい！ わしはこゝに止つてゐる！ もとよりそんな事をしたとて大した事とはいへないのだ！ とにかくわしは男だもの、そして女でもなければ、また子供でもないのだからな！ それでも男はいつか老翁になつて了か？

う。そしてわしは今、——それがヒシ／＼と感じられるやうだ——時鐘のひびきに應じて、年を取つて行くのだ！

ゲノフェーア。御止め下さい、御止め下さい！

ジークフリート。まあ、そなたは、わしがそれを止めうると、思つてゐるのか？

カスバール(誓を投げ)。殿様、殿様、あなたの御子息を御取りなされ！ その外の事は、神の御心にお任せになつて！ あゝ、わしはもうたまらない。それでもわしは恩寵を希望してゐるのです！ 悪魔が光りを横さまに遮つた、そしてわれ／＼をけしかけたのです。そこでわれ／＼はそこをめぐめて突刺しました、そしてわれ／＼の味方を刺したのです。——奥方様、私は——(彼は強擧的な笑ひを始める)さうだ！ わしが泣かうとおもふときは、笑ひ出すのだ、いま／＼しい癖だ！——まあ、あなたは、あなたのこんな風にしてゐられるのを

見て、どんなに私の心が悲んでゐるかを、御分かりになりませう——
しかし私の申すことを信じて下さい、この方も——この方も——まあひと目
この方を御覧なされい、この方はまだ、あなたと別れたときのあの方でせう
か？（ジークフリート）あなたの苦惱は今日報ひられました。さあ神があなたに呈す
るところの者を、御取りなされい！（彼は彼にシユメルツェエツ）早く、早くなされ
い！ さうしないと私の方がお先に！

ジークフリート（シユメルツェンライ）。わしの可愛い子！

ゲノフェーファ。わたしはずるぶんと苦みました。それは本當です。それでも
この瞬間は、何もかもつぐなつて呉れます！ わたしはあなたから、わたし
のための苦痛を取り去ります。あなたはわたしから、わたしの子供のための
苦惱を取り去つて下さるのです。何つちが一番骨の折れることをしたか、そ
れはたゞ、神様がしつて御いでのなるのです。

ジークフリート。わしの妻、わしの可哀想な、青白い妻よ、わたしはわしの血
管からあなたの血管へ血を注ぎ入れることが出来るならなあ！ さうすれ
ば——

ゲノフェーファ。さうすれば、わたしは死んであなたと一緒に出来る
のですね。そしてたゞ死ばかりでなく、わたしの涙はあなたの涙と一緒に
るのですね——いゝえ、可愛いゝお方、この世の最後の仕事をわたし達は御
一緒にいたませう！ それは一人ではあまりに荷が勝ち過ぎます！

ジークフリート。おゝ、もう止めて呉れい、もう止めて呉れい！ わしは天
使を鞭打つたのだ。彼はわしに姿をあらはした。そして彼はその姿を示した
ことによつて、彼がとめてくれなければ、わしを殺さねばならないことを、
感づいてゐないのだ！——そしてこの天使を、この女を、彼は殺害しようと
したのだ！（突發的な聲で）あのゴローめ！

カスパール。 彼を御呪ひにならんやうに。彼は、私が彼を刺し殺した前に、

私が彼を先づ拷問しなかつたといふ譯で、私を呪つた位ですから。彼のことはそのうち御話しませう。今はこれだけ申上げて置きます！ 彼は奥方を殺害しようとしたのではありません！ 私はあなたへ宛てた彼の手紙をまだ持つてをります！

ゲノフェーファ。 あの人の上の地面よ、軽くあれ、あの人の審判も軽くあれ！

ジークフリート。 アーメン！ たとへこの言葉は爪でもつてわしの咽喉にしがみ付いてはゐるものゝ、どうしても言つて了はなければならぬのだ！

もう一度、アーメン！ わしが彼に罪を許すことを拒むとは、わしは何たる人間だ！ (彼は合掌する) さうだ、神よ、わたくしの罪を許し給へ、わたくしが——いや、いや！

ゲノフェーファ (いのりつ)。 ——私の罪人 (つみびと) を許す様に？ さう有仰りたいのね、

わたしのジークフリート？ たしかに、あなたは「主の祈禱」を御祈りになります！ たしかにね！

ジークフリート。 それはこの世における最もむづかしいものだ！——しかしわしにも出来ないことはあるまい！ (合掌す) 私がゴローを許すごとく！——

さうだ！——今やわしには、そなたやわしの子供を接吻する勇氣が出て来た！ (彼はそれを)

カスパール (大きな聲で)。 さあ、あつまれい！ (彼は喇叭を吹く、近くから答へる。喇叭がきこえる。)

ジークフリート。 わしは、その上そなたがわしと一緒になることを希望するのだ！

ゲノフェーファ。 あなたの子供は、たしかにあなたと御一緒になります！

ジークフリート。 そなたは何を言つてるのだ！

ゲノフェーファ。 何のためにわたし達は、お互ひに悩み合ふことがあるのでせ

う！ 今日神は、わたし達の微笑を御覽になりたいのでせう。わたし達の
歡喜よろこびは神の歡喜なんでももの！

ジークフリート。 神のみ心のまゝになれ！

第五場

コンラート(多くの獵師と共に登場。彼。) 牝鹿はつかまりましたか？——おや！

カスパール。 膝よ、ひざまづけ！ 死んだ人達が復活したのだ！ 奥方が再
びお見えになつた、それをここに。そしてお子様もお見えになつたのだ！

コンラート。 奥方よ、永久に生き給へ！

カスパール。 さあ、奥方の爲に馬の準備をせい！

コンラート(二三の僕と共に去る。)

ジークフリート。 その處置はカスパールよ、うれしいぞ！ (ゲノフェアに。) 七年の

月日、それは充分ではなかつたか？ これから新しい七年が始まるのだ！

その七年は最も短い七年なんだ！——そなたはまだ心が定まらぬのか？

ゲノフェア。 いえ。いえ！ わたしはたゞ、一瞬間の御猶豫を御願ひいた
します、たゞそれだけを御願ひいたします！

ジークフリート(急いで外の者達と遠ざかる。)

ゲノフェア(ついのり。) たゞもう七日だけ！ 人間といふものは、私が考へ

てゐたほど強いものではありません。たゞ七日だけ！ それからさし招いて
下さいまし、神よ！

ジークフリート(現れる。)

ゲノフェア(彼の方に向つて。) さあ、御一緒に参りせう！

(喇叭の聲。)

ゲノフェーファ註釋

人物

1. 宮中伯又は別格伯 (Palzgraf)、領地内に於いて王者に等しい特權を有する伯。
2. 浪漫派以來、詩的時代とは中世の意である。ヘツベルの日記(一八四二年二月二日)に従へば、「カルル・マルテルが回教徒の首將アプト・テル・ラーマンを敗つたところの、プアティエ (Poitiers) の戦は、七三二年に起つた。私のゲノフェーファの時代はその年に相當する。」

第一幕

1. 騎兵——Reisiger (der berittene Soldat)
2. グリムムの童話集に於ける「いばらの中の猶太人」(Der Jude im Dorn) 参照。
3. Die Mohren (古書には die Mauren) は、今では亞刺比亞人、マホメット教徒の意に用ゐられてゐる。

4. ヘツマルの日記に従へば、「彼(ゴロー)は、大人と青年との中間にあつて、恐ろしい情念からうち貢がされ、陥みにじられたがために、正にその爲に、彼は絶えず極端から極端へと飛躍するのである。」これは詩人がユードイットを妻にしてかつ處女にしたのと、同巧異曲であると言へよう。
5. あこがれる——*Seizen* は、*hien* には *„gierig sein nach etwas“* といふ、語の原義において用ひられてゐる。かゝる用法はゲーテにおいても見出される。
6. ヘツマルの如き鋭敏な藝術家は、非常に苦澁なる悲哀においてすら、一種の快感を感じたのである。「別離の悲哀はいかに甘美なものであらう！ それがないならば、誰が別れる事が出来よう！」(一八三九年三月十日の日記参照。)
7. ゲノフェーフアは、彼等兩人はその愛への沈潜のためにはなほ、永久の時をもちうるであらうと信じてゐた。かくして最初の別離は彼女に、萬事は過ぎ去つたかの如き感を、起こさしめたのである。
8. 愛の焔を自分の上に浴びないものはまた、かの最高の死を遂げうる資格がない、の意。
9. 紅の薔薇を夢みる白薔薇は、愛を夢みる無邪氣の意である。いかにも面白い象徴的の表現である。この戯曲においてもしばしば象徴として若しくは比喻として、花のことが述べられてゐる。ヘツマルの花に對する愛については、彼の「私の幼年時代」を讀むと分かる。
10. この世にあつて——*hier in dieser Welt*

11. 劍をもてる天使——*Cherubime mit dem Schwert* (*Cherubime* は普通 *Cherubim* であるが、韻律の上からさういふ形になつてゐるのである。)
12. 樂園はこゝでは甘美なる接吻を意味してゐる。
13. *Beelzebub* (*Fliegengott*) は、エークロンにおいてフィリスティアの民から尊崇されたるバール神。猶太人においては、基督の時代において悪靈の首領とみなされてゐる。
14. テオドール・キョルネルが彼の譯詩「*Der Kynast*」において詩的に描寫した、リーゼンゲビルゲの民間に残つてゐる、キナストの傳説。

第二一幕

1. 自分は再び「生」に對する執着を感じた、の意と思ふ。その生は、自分の意志次第ではすてうるのであるが、とにかくその生に心がひかれたやうである。
2. 彼からの——*ジークフリート* からの。
3. ヨルダン河のことである。この河にひたることによつて、將軍ナアマンは癩病から救はれた。(舊約、列王紀略下、第五章十四節参照。)
4. 猶太人の迫害は中世においては、尋常茶飯事であつた。彼等が井戸に毒を投じたといふ事は、

疫病が流行した時代においては、特に十四世紀の中葉に黒死病が全歐洲を襲つたときには、しばしば彼等の罪に歸せられた。

5. 「彼等ゴルゴタ譯けば即ち觸髅と云へる處に來り、醜に體を和せてイエスに飲ませんとしたりしに、嘗めて飲むことをせざりき。」(馬太傳第二十七章三四。)
6. こゝでは伊多利を指してゐるのである。
7. 古エルザレムの聖丘。ソロモンの殿堂と宮殿とのあつたところ。

第三幕

1. 第二の父となるべき人——彼女の生れるべき子にとつての父。 Den zweiten Vater——für ihr Kind.
2. マルガレータは自分の私生兒を殺した女である。それゆゑこの死んだ子供が彼女につぶやいた言葉も、彼女のかくれた罪に對する呪咀の如きものであらう。或は Kindermörderin といふやうな言葉だ。
3. プロクテン山には幽霊や冤女が出現するのである——とくにグルブルギスの夜に。
4. ジークフリートが歸つて來た時のことを想像して、ゴローは空想を逞しくするのである。

5. 傷——die Wunde は女性名詞なるが故に、他の傷のことを姉妹といふのである。
6. Fatime はマホメッドの未婚で、アリスの妻。彼女はマホメッドの神的光明を彼の苗裔へ傳へたる人として、考へられてゐる。

7. 第八場の騎士トリスタンの物語を見よ。
8. ゴローは、ゲノフェーフアは、彼女がその肖像畫において見るところの、彼女自身の美に對して、奴隸的に呪縛されて了うほど、酔ふことが出来るだらうか、といふ疑問を起すのである。
9. 基督の傷は五つ、といふことになつてゐる。七つ、といふのは詩人の思ひ違ひである。
10. 慾望を起すを起す——empört. empören をどういふ意味に用ひることは、近代においては稀になつた。

11. その——。その野獸の肉を。 Vom Wild. この詩の原文はかうである。

Der Jäger zog—wo zog er doch?

Der Jäger schoß—was schoß er doch?

Wer fragen Kann, der zog nicht mit,

Ich denke auch, er ass nicht mit

Vom——

12. フィラックスは犬の名。

13 自分の妻が密通したといふことを、イロニツシーシュに裝飾といつたのである。

第四幕

1. 星標——勳章。十字軍の凱旋の將は、さういふ勳章を授けられたものであらう。
2. 傭兵——Landsknechteは、この戯曲の動作の起つた時代においては、ありえない。それは第十五世紀の末葉になつてやつと現出したものであるから。
3. いはゆる Wirtshaus が第八世紀において獨逸において現れたか何うかは、確實ではない。(こゝんな事はこの場合、何うでもよいことではあるが)第十二世紀の初葉には、すでにかゝる種類の家がもう出来たやうである。
4. 鴉は殘酷な性をもつた者とされてゐる。かくしてこゝの意は、不吉なしらせをもたらす人を、ラインの彼岸なるストラスブルクまで——ジークフリートの許まで——送らぬ方がよからう、の意であると思ふ。
5. クレータの迷宮(ラビリント)に閉ぢ込められたるミノタウロス(牛頭人身の怪物)の傳説参照。
6. 自分は自分の心臓には問はぬ。果して自分の妻が密通したとして、その悲哀と憤怒との爲に自分の心がまゐつて了つても、そりや何うも仕方がない。自分はむしろ男子の品位をたもつて、自分の

理性に問うてみよう、の意。

7. 心情といふものは中々するものだ。自分は今心情に問はない、心情を不問に附するといつたが、やはり心情は底廻りをしてその要求を高める。自分は自分の侮辱の報償を求めたくなつたやうだが。さうだ、そしてその爲には自分は、ドラゴンのやうな僕に對して報償は求めぬ。それは自分と同格の妻からでなければならぬ、の意。
8. 神は六日目までに世界や人間を創造して了つた。それまではよかつたが、神によつて造られた人間が、何うしてこんな非道いことをやるかと思ふと、それは神のしくじりのやうに思はれる、位の意。

9. 魔法使ひの女は中世においては、火刑の如き嚴罰をうけることがよくあつた。
10. マルガレータが粉屋の男と通じて出来た私生兒——それを彼女は殺したのである。
11. 牢にゐるゲノフェーファの子供。
12. 神のことである。自分を支配せる悪魔を恐怖せしめる神。
13. 罪業ふかき肉體は悪魔の仕業(Werk)として考へられてゐたのである。
14. 地獄の焰。
15. マルガレータ。
16. ゲノフェーファ。

17 自分は生きてるうち、心ならずもゲノフェーフアさまに、非常にわるいことをしてしまった。その罪は帳けしにされるであらうか——マルガレータが自分に對して行つた不正のために。その罪が帳けしにされるなら、自分はマルガレータの罪を許すことが出来るであらう。さうであれば幸ひだの意。

18 自分の法外な極悪のために。

第五幕

1. 立派なわるものだ——こゝではイローニッシュにいつたのである。つまりぬ、けちな悪漢だ、の意。バルタザールが自分のやつた不埒を辯疏したので、かくいつたのである。
2. もしそんな事になつたら、みぐるみさし上げる、胴衣までも、の意。
3. ジークフリートへの告白の手紙。ゴローはその手紙を残して、森へ行つてゲノフェーフアの死をさへぎり、自ら死なむと考へたのである。
4. 彼女を殺せといつて彼があづけた劍が。
5. 後のゲノフェーフア、参照。
6. ゴローどのがゲノフェーフアの作り話を信じて、氣が弱くなりはしないかと、來るときに注

意されたのは、こゝの事だな、の意。

7. 自由なる人間によつての奴僕の殺戮は、その奴僕の主君に對する侮辱と認められてゐた。そしてその主君は彼を手討ちにすることが出来たのである。
8. 一つの言葉。こゝでは彼女を殺せよとの、ゴローへの彼の命令をさしたものであらう。
9. 別種の犠牲——普通のやりがたで殺されたぐらゐでは、自分の罪業は償はれぬ。

後のゲノフェーフア

1. マルガレータ。第四幕目の終末、参照。
2. 一分はおろか一秒をも争ふかのやうに。——第三幕終末のドラゴアの靈の台辭、参照。
3. 舊約秘書中の「火燭の中の三人の男の讚歌」参照。
4. 最終審判のときに、善人、罪なき人は神の右に座する、といふことになつてゐる。
5. Meine Faust ist rot——悔恨と怒りのあまり、自分のこぶしは赤くなつてゐる。
6. 味方——Freunde ゲノフェーフアやジークフリートのこと。ドラゴーもいれていゝだらう。
7. Die letzte Arbeit 神への最後のつとめ。自分は自分の罪の疑ひが晴れ、自分の子供がやつとその父を見いだしたことに對して、神へふかく感謝する。自分は神への祈念をいよくふかくしよう。

しかし自分は今、愛する夫を再び見出した。それからまた幸福になれるかもしれぬ。しかし現世の幸福は、はかない、一時的な、官能的な要素をもつたもので、とすれば神への信念から遠ざからしめる。幸福になつて神の信念を保持することはむづかしい。自分は今、現世の幸福と冥福との何れかをえらばねばならぬ。しかし自分は断然として永久の恩寵に心をむける。それを自分はあなたと一緒に心がけよう、の意であらう。

8. 彼は「主の祈禱」を祈らうとしたのだ。「主の祈禱」に就いては。拙文「ヘッベルの宗教観」参照。

9. 自分は前の七年のお前の苦業をとりかへすため、これから新しい愛の生活にはいらう。それは幸福な生活だ。今後はいかにお前を愛しても愛しきれない。新しい七年は最も短い七年だ、の意。

「ゲノフェーファ」解説

ヘッベルの悲劇「ゲノフェーファ」(一八四〇年九月十三日起稿、翌一八四一年三月一日脱稿)は、詩人がハムブルクにあつて、未だ世間からは認められず、極度の貧困と懊惱とを體驗しつつあつた時代の作で、處女作「ユードイット」の次に書かれたものである。

一、材料

材料は、中世の有名なゲノフェーファ傳説である。この傳説は主として文學的の産物であつて、十

四世紀或は十五世紀において、ラーハ(Larch)のある僧侶から、始めて羅旬語において書かれたものであるといふ。而してこの傳説が民間に普及するやうになつたのは、佛蘭西のエズイット教僧侶ルネ・ドゥ・セリシエー(René de Corsiers)の作、「解かれた無實の罪、一名、ブラバントの聖女ジエネヴィエーヴァー代記」(„L'innocence reconnue, ou vie de sainte Geneviève de Brabant")に依つてである。この通俗本の獨譯としては、カプチーネル派の僧侶マルティヌス・コッホニウス(Martinus Kochemi)のそれが、尤も有名である。更に吾々は、グスターフ・シュワープの通俗本(レクラム版にある)によつて、尤も手近に、この傳説に接することが出来る。

その傳説の梗概はかうである。ゲノフェーファはブラバントの侯爵の息女で宮中伯ジークフリートの夫人であつた。紀元八世紀頃の人である。ジークフリートはたまたま十字軍の指揮官として出征しなければならなかつたが、彼は別離に臨んで執事ゴローに、妻の保護を委ねて行つた。しかるにゴローは、ゲノフェーファの嬋妍たる美に迷ひ、つひにその烈しい戀の思ひを彼女に告げたが、貞操の念かたき彼女は、いふまでもなくそれを斥けた。戀の容れられない遺恨をはらす爲に、ゴローは一味の者とかりらひ、城の料理番ドラゴを欺いて、彼をしてゲノフェーファの寢所に忍ばしめ、かくして彼女に密通の罪をきせて了つた。そしてドラゴを捕へて人をして毒殺せしめ、ゲノフェーファを牢獄に投じた。一方ゴローは、戦地よりの歸國の途にあるジークフリートの許に走り、まことしやかに事の次第を報じたので、ジークフリートは輕々しくも彼の言を信じ、自分の歸城するに先だつてゲノ

フェーファを、彼女が牢において生みおとした子供もろとも殺すべき事を、ゴローに命令した。ゴローは急ぎ城に歸り、二人の僕に命じて、ゲノフェーファとその子供とを森の中へ連れ行き、そこに二人を殺し、その證據として彼女等の眼をもたらしべきことを命じた。二人の僕は森に彼女等を連れて行つたが、さすがに刃を下すに忍びなかつた。それで彼女等を通れしめ、しかし二人を殺した證據として、獵犬の眼をくり抜いて城にたち歸つた。ゲノフェーファは山中の洞窟にかくれを見出し、そこで木の實草の根に命を繋ぎつゝ、ひたすら神への祈念にふけつてゐた。かくして七年の年月が経過したが、たま／＼妻の書き残していつた手紙によつてゴローの舊惡を豫感してゐたジークフリートは、日頃の懊惱を紛らす爲にその森に獵に出かけた。そしてそこでゆくりなくもゲノフェーファ——罪なくしてかくも苦められたる聖なる女と、彼女の子シユメルツェンライヒとに邂逅して、二人を城に連れ歸つた。ゴローは、ゲノフェーファが彼の罪を宥すべきことを主張したにも拘はらず、宗族の人達の意見にしたがつて死刑に處せられた。ジークフリートはひたすらゲノフェーファを慰藉することに努めたが、しかし現世の幸福は、もはや彼女の靈をひきとめることが出来なかつた。彼女の靈はいくばくもなくして、神の御國にたち去つた。ジークフリートとシユメルツェンライヒとは、彼女の元ぬた洞窟に行き、そこで餘生を、ゲノフェーファの記念のために送つたのである。

この傳説は、ヘッベルには夙に知られてゐたもので、彼は故郷のヴェッセルブレンにゐたときにすでに、この傳説を取扱はむと考へてゐたやうである（一八五八年六月十四日の、デインゲルシュテットに

宛てた詩人の書翰参照)。しかし彼の、この材料に對する興味が、明確な形ちを取つて現れたのは、ミユンヒェン時代（一八三六—三九）において、教授ヤホルツの講義によつて刺戟されてからの事である。

二、成立次第

この作は可なり複雑な動機と成立次第とを持つてゐるが、次にその主要なる點に就いて記して置かう。

(イ)「ゲノフェーファ」の前型

一八二九年或は一八三〇年において、即ちヘッベルの十六七歳の頃に書かれた戯曲断片「ミランドラ」は、その想念に於いてではないが、その主題において、「ゲノフェーファ」の前型と見ることが出来る。その頃はヘッベルがシラアの影響の下にあつた時代で、この断片の如きも、シラアの「群盜」に刺戟されて出來た、彼の最初の戯曲上の試みである。即ち、その作の主人公ミランドラは、環境に對する失望から、カール・モーアのやうに、盜賊となることになつてゐる。

この断片の内容はかうである。ミランドラはフラミーナといふ少女と戀に落ちて、彼女と婚約した。彼の許嫁の願望にしたがつて、彼は彼の親友にして、彼の生命の救助者なるゴマツチーナを招いた。この友が到着するや否や、ミランドラは手紙によつて、父の臨終の床に侍すべく、ネアーベルへ呼びかへされる。そこで彼はフラミーナをゴマツチーナの保護に委ねて旅立つのである。しかるにゴマツ

チーナはフラミーナに對して烈しい戀を感じる。しかし彼はミランドラに對する友情の爲に、この罪
深き情念を克服しようと努める。この彼の苦悶につけ込んで、野師的な城の僧侶ゴンズーラは、ミラ
ンドラにはフラミーナの外に一人の戀人があるといふ事實を捏造して、連りにゴマツチーナの心を咬
りたてる。つひにゴマツチーナもその僧侶の言に欺かれて、フラミーナを説いて、彼女の戀を捕へる
に至つた。歸つて來たミランドラは、友情と戀愛とに絶望して、盜賊となつて了うのである。(この作
に就いては、アルノー・シヨイネルトの「若きヘッベル」、メスツネリーの「ゲノフェーフ解説」、ウエルネ
ルの「ヘッベル評傳」参照。)

この斷片は元より未熟の作ではあるが、いろ／＼の點において、後年のヘッベルを忍ばしめるもの
を包蔵してゐる。とりわけその主要題目において、即ち、友情と戀愛との葛藤を描ける點や、純粹な
る心が情念のためいかに荒廢するに至るかを示せる點において、この作はたしかに「ゲノフェーフ」
の前段階とみることが出来る。『ゴローは、ウエルネルの言つてゐるやうに、「ゴマツチーナから發展
する——たとへばフラミーナはまだゲノフェーフではなく、ミランドラはまだジークフリートでない
にしろ。』

(ロ)ヘッベル前のゲノフェーフ劇

ヘッベル以前にゲノフェーフ傳説を取扱つたもので、「スツルム・ウント・ドラング」時代の詩人にし
て畫家なる、フリードリッヒ・ミュラー(一七七五—一八五、普通マラー・ミュラーと呼ばれる)の五幕劇

ゴロートゲノフェーフ(ミュラーには別に「宮中伯夫人ゲノフェーフ」の作がある)と、浪漫家ルード
キッヒ・ティークの戯曲「聖なるゲノフェーフの生涯と死」とは、詩人をしてこの傳説の戯曲化に着手せ
しめる刺戟となつた。

ヘッベルの日記(一八三九年二月二日の條)にかうある、『マラー・ミュラーの「アモールとハックス」
は非常にいいものだ。彼の牧歌は獨逸文學において比肩すべき者を持たない。……彼の「ゲノフェー
ーフ」はそれに反して無である。ティークがこの作を以て沙翁の誤解されたる摸倣もしくは集注とした
のは尤もである。』彼はなほその日の日記において、ミュラーの同作における唯一の美點は、ジークフ
リートが森の洞窟においてゲノフェーフと邂逅する瞬間の描寫に存するといひ、尙がう續けてゐる。
『私はティークの「ゲノフェーフ」を読んでゐないが、大した期待も持つてゐない。しかし私はしばしば、
この材料に就いて熟考した、そしてその戯曲的價値をひとりゴローの性格において見出した。戯曲的
詩人は古き通俗本のゴローを用ひることは出来ない。たゞ彼が、この燃えるやうな、性急な性格を
人間的動機から悪魔的に行動せしめることに成功したときのみ、彼は悲劇を作り得るのである。ゴー
ローは自分の保護に委ねられた美しい婦人を戀する。而して彼はウエルテルではない。その點に彼の不
幸、彼の罪及び彼の是認が存するのがある。云々』

ティークの「ゲノフェーフ」に關しては、ヘッベルはかう言つてゐる、『私はゲノフェーフに着手し
た。ティークの「ゲノフェーフ」を読んで、不満を感じたからである。最初の二三の場面は可なり旨く

行つた。尤もこれは劇場に適する戯曲とはならないだらう。(一八四〇年九月十三日日記参照。)

ヘッベルのミュラーの「ゴローとゲノフェーファ」に對する批評——それをカール・ツァイスは稍と不當であるといつてゐる——の當否は別問題として、彼の材料に對する着眼點からみて、ミュラーの作が彼に何等の満足を與へ得なかつたことは、想像するに難くない。數個の美しい場面を持ちながら要するに叙情詩と叙事詩との混合物であり、シラアの謂はゆる「噁舌」に過ぎなかつたテークの「ゲノフェーファ」が、彼を反抗的に創作的氣分に驅つたことも、容易に理解される——たとへその出來榮えにおいて彼の作は、多少テークのそれと同じ弊に陥つてゐるところがあるとはいへ。(ゲノフェーファ傳説を取扱つた諸戯曲に就いては、アルノー・ゴルトツの「獨逸文學に於ける宮中伯夫人ゲノフェーファ」参照。)

(ハ) 詩人の體驗

かくの如くゲノフェーファ傳説は、夙にかつ永くヘッベルの關心事であつたにしろ、彼のこの作に對する直接の、力強いかつ點火的の動因は、ハムブルクに於ける詩人の體驗そのものに歸しなくてはならない。

それは詩人のエリーゼ・レンジングとエンマ・シュリョーデルとに對する關係である。

ヘッベルとエリーゼ・レンジングとの關係は、茲に委しく書き記す邊を持たないが、とにかく彼女は詩人の生活とも藝術とも離るべからざる關係を持つてゐる女性であつて、「マリア・マクダレーネ」の

ララにしる、ゲノフェーファにしる、彼の悲劇に於ける惱める女性には、みなこの哀れなるエリーゼの面影が刻印されてゐるのである。彼女はヘッベルよりは九つも年上であり、容姿も優れてゐるとは言へなかつたが、しかしいかにも優しい心を以て彼を愛し、全く犠牲的な精神を以て彼に盡した女性である。彼女には、ヘッベル自身も言つてゐるやうに、少しの利己心も、人生において必要なだけの利己心もなかつた。詩人は彼女に深く信頼し、彼女の心靈の美にひきつけられ、かつ肉體的關係までも結び、子供の二人までも生ましたのであるが、それは、彼をして言はしめれば、決していはゆる戀愛關係ではなかつた。かつ自己中心的な、峻烈な詩人は、この酷烈な食人者^{カニバリ}は、エリーゼに對して極めてわがまゝな、残酷な態度を取つた——そこに虚偽な、もしくは虚飾的な分子は、少しもなかつたにしろ。しかしエリーゼはすべてを堪へ、すべてを宥して、詩人の爲に盡した。一八四一年十二月二十日の日記に、彼はかう書きつけた、「今日私はシラアの優雅と品位とに關する論文を読んだ。彼が、感動の状態において崇高にうつり行くところの、美しき魂に就いて言つてゐることは、いかにエリーゼに適してゐるだらう。まるで彼女を寫した繪を見るが如くである。私はこれまで、彼女のごとくかくも靈妙な、天國的の調和を持つた人間に、出ツこわしたことがない。彼女がなかつたなら、私は私のゲノフェーファを書くことが出来なかつたであらう。」(詩人とエリーゼ・レンジングとの關係を詳述した新著は、ヘルヘルム・ルツの「Fr. Hebel und Elise Lensing: である」)

エンマ・シュリョーデルは、ハムブルクの某門閥家の娘で、詩人自身の言葉に従へば、「不思議な魅力

をもつ、うち霞む夜の星空の如く幽麗な形姿」(Eine Erscheinung von wunderbarem Liebreiz, dämmernd, wie der Sternenhimmel in der duftigen Nacht)であつた。ヘッセルは彼女とある知人の家へ遇つたのであるが、彼の燃え易き情念は直ちに彼女に向つて點火した。彼女も遂しく彼の戀に答へた。憐める詩人の心は、この若く美しき少女によつて、暫く有頂天の歡喜を経験した。當時彼は、エリーゼに宛てて書いた書翰において、極めて露骨にエンマとの戀を告白し、かつ彼女と共にエリーゼの健康を祝して飲んだ、といふやうな事まで書いてゐる。尤も彼がこんな手紙を果してエリーゼに送つたか何うかは、疑問であるが、とにかく當時懷妊の状態にあつたエリーゼは、その事を知つて、いかに血の出るやうな思ひをしたことであらう。それはとにかく詩人のエンマに對する戀は、不純な者ではなく、かつ餘り長く續きはしなかつたが、彼が端的に熱烈にかつ陶酔的に、いはゆる戀といふものを味つたのは、けだし一生を通じてこの女性に對してのみであらうと、思はれるのである。而してこの戀の情火こそ、「ゲノフェーファ」におけるゴローの「フィロソフィア熱病的瞑想」となつて、爆發したのである。「ゲノフェーファ」を書いてるときに、彼は字義通りに寢食を忘れたり、室の時計を取り退けようとしたことなどを考へると、吾人はそのときの詩人の創作的氣分がどんなものであつたかを、想像しえよう。一八四〇年九月二十一日の日記に、彼はかうも書いてゐる。「感謝の涙、それを取つて下さい、永久者よ！私の魂のあらゆる深處から、ゲノフェーファが現出して来る。」

かくの如くにしてヘッセルの「ゲノフェーファ」は、「ゲテ」以後の大規模なる文學的告白となつたのである。尤もゲテは例へば「クラヴィゴ」によつて、フリーデリケに對する彼の變心の苛責から救はれたであらうが、ヘッセルはむしろゴローにおいて、自己の情念と苦悶との是認を見出さうとしたかのやうにも見える。

三、「ゲノフェーファ」の結構

ヘッセルは「ゲノフェーファ」の創作に際して、大體において古い通俗本の傳説に忠實であつたが、無論ゴローの性格描寫においては、傳説とは全然獨立であり、なほ一つには時代色を與へむとの企畫のもとに、二三の挿話をつけ加へた。次に全篇の動作發展の骨子をきつつけることにする。

ジークフリートは出征の間に、ゲノフェーファと別離を告げる。ゲノフェーファは——深厚なる愛を常に胸のおくかに秘めてゐたやうなゲノフェーファは、悲哀のあまり、思ひのたけをジークフリートにうちあける。彼女は彼の頸に縋りついて、接吻する、そしてしまひに失心状態になる。城に止つてゲノフェーファの保護を命じられたゴローは、この見るもまばゆき光景を眼のあたりにして、今までは畏敬してゐたゲノフェーファに對して、忽然として烈しい戀を感じる。元氣な純良な青年は、たちまちにして大人となる。「天のいとも純らかな光景が地獄を點火したのである。後に彼が告白するやうに、「聖なる女が戀しうるが爲に、彼女が接吻しうるが爲に、」彼は彼女を戀するに至つたのである。彼はしかしこの抑えがたき罪深き情念を克服せむが爲に、最高の危険に生命をさらさうと決心する。(第一幕)

ゴロはこれまで殆ど人の昇つたことのない、眼くめるくばり高い塔にのぼつたが、幸か不幸か彼は墜落しなかつた。(この光景は舞臺に現はされてはぬない。)彼はこれを以て、彼の裡に悪漢を熱せしめむとする神の指示と、解釋する。彼はゲノフェーファ——かゝる絶美の存在がすでに必然的に罪であり、また彼の罪となるのだ——をみて、「怒りたけれる正當の防禦において」(In Grimmiger Notwehr) 劍を抜て放つ、然し直ちにそれを自己の胸に突き刺さうと考へる。獨りて苦み悶える彼をみて怪みつゝあるゲノフェーファに、彼は彼が自分の生命を試みた罪の宥恕を乞ひ、かつ自分の劍を淨める事を、冀望する。彼女は罪なくしておびやかされる女性の保護の爲に、その劍は抜き放たるべきことを説いて、それに淨めを與へる——何等の罪もなくして迫害される老いたる猶太人が現れる。人々は彼を殺さうとするが、ゴロはそれを抑止する。しかし猶太人が自ら迫害と殘殺とを冀ひ、世界の終末を力説し、基督教徒に對して猛烈なる呪咀を浴せかけるに及んで、ゴロは彼を斬り倒して了うのである。(これは中世の時代色を出むが爲に點出された場面であるが、一つには罪なくして迫害される猶太人の姿において、ゲノフェーファとの平行を暗示し、一つには猶太人の呪咀において、後の恐ろしい悲劇に對する豫感を與へしめむとしたものと思ふ。)(第二幕。)

ゴロの乳母カタリーナの姉妹なるマルガレーテが、城にやつて来る。彼女は心ひがめる魔法使ひの女である。二人の女は、美しき、心は雪の如く純なるゲノフェーファに對して、分けもなき反感をもつてゐる。二人は戀に惱めるゴロの爲に、戀の取持ちをしようとする——カタリーナはゴロに

對する盲目的の愛情から、マルガレーテは彼女の魔女的反抗心から。——騎士トリスタンがジークフリートの使者として城を訪れ、その序でに自分に戀して自分を捕はれの境遇から救ひ出して呉れた、回教徒の王女の物語をする。(トリスタンはしかし國に残して來た妻に對する信實から、異國の少女の戀を容れなかつたのである。この物語は、ゲノフェーファの比ひなき貞操に對する一つの照光とも見られる。)— 一人の畫家が、ゲノフェーファの畫像を、彼女のもとに持つて来る。ゴロはこの畫像を見て、ゲノフェーファの前で、それに接吻する。そして彼女が彼の戀を容れて呉れるなら、自ら死んで了うと言つて、そこを走り去らうとする。彼女は女を止める。それを一つの默契と解し、かつ燃える思ひに堪へきれなくなつた彼は、彼女を包擁する、「私はあなたを焔の中にひたして了はう」彼女は彼をつき退ける。——マルガレーテは何うかしてゴロの思ひを遂げしめむが爲に、ゲノフェーファに密通の濡衣をさせ、しかる後に彼女を彼の心に従へさせることにしると、彼に説きすゝめる。家僕ドラゴーはこの陰謀の犠牲となつて、ゲノフェーファの寢所において、カスパールの爲に殺されて了う。ゲノフェーファも牢塔におしこめられる事になる。(第三幕。)

ゲノフェーファは牢塔において、わづかに一敷の葉と水と麵麩とを與へられて、辛くもその命をつないでゐる。そこで彼女はジークフリートの子を生み落とした。ゴロは牢塔へ行つて、自分と共に城を遁れる事をすゝめるが、無論彼女はそれに應じない。ゴロは斷ちがたき戀と良心の苛責とに驅られて、森へ走り、怒りたけれる牡鹿の角にかゝつて自ら死なうとするが、たゞ氣絶をしたに過ぎな

い。(以上は動作には現はれず、すべてゴローとカタリーナとの對話によつて報道される。)——歸國の途にあるジークフリートは、病の爲にストラスブルクにおいて滞留してゐる。同市へマルガレーテも行つてゐる。ゴローもそこへ馬を馳せて、ジークフリートにゲノフェーフアの不義の巔末を言ひ傳へる。ジークフリートの苦悶をまのあたりに見て、ゴローは「私は嘘をついたのです！」と言ふが、その言葉はジークフリートによつて、却つて善意に解される。ジークフリートはゴローと共にマルガレーテの許に行き、妻の所行が果して事實であるか何うかを、魔法によつて證示して呉れることを命令する。魔女の鏡裏にたち現はれる幻像によつて、ジークフリートは妻とドラゴとの密通を信じて了う。彼は、自分より先に城へ歸つて、妻を子供もろとも死刑に處すべきことを、ゴローに命ずる。——狂舞してうち倒れてゐるマルガレーテの前に、ドラゴの靈が現れて、聖女ゲノフェーフアの七年の苦行によつて、世界の罪が淨化されることを説き、かつ七年の後にマルガレーテはその大罪をジークフリートに告白せねばならぬことを、豫言する。(第四幕。)

ゴローはハンスとバルタザールと共に、ゲノフェーフアと彼女の子供とを森に連れ行き、そこで二人を殺すべきことを命ずる。二人の僕は、彼女と子供とを森に連れて行く。彼等に從つて来た狂人のクラウス(彼はかつてゲノフェーフアの恩恵によつて城に連れ來られたのである)は、彼女を突き殺すことを命じられるが、靈感にでも打たれたかのやうに、かへつてハンスを刺し殺して了う。バルタザールもクラウスに殺されさうになるが、ゲノフェーフアはこれを抑止する。バルタザールは流石に彼女

女を殺しえず、彼女等を森の奥へ遁れしめ、かれて示し合せたところで、ゴローに會ふ。ゴローはゲノフェーフアが牢を出る前に再び、彼とともに落ちのびることをすしめたのであるが、今や森へ行つてゲノフェーフアの死を止めて、自ら死なうと考へたのである。しかし彼は、すでにゲノフェーフアが殺されて了つたことを聴き、憤怒のあまりバルタザールを殺して了う。ジークフリートがカスパールを従へてそこへ來る。ジークフリートも自分の命令の輕卒であつた事を感じて來たが、すでに妻の殺されたことをきいて、悲嘆に沈む。ゴローはジークフリートのたち去つたあとで、自ら兩眼を抉り取る。カスパールが彼を殺してやらうとする所で、幕である。(第五幕。)

これに本來の「ゲノフェーフア」劇は、終つてゐる譯であるが、ヘッセルはその後舞臺監督ホルタイの勸告に從つて、「後のゲノフェーフア」(Nachspiel zur Genoveva)を書いた(一八五一年一月二十一日完成)。前劇の大詰以後七年たつたところに、その動作は始まる。その後快々として樂まなかつたジークフリートは獵に出て、カスパールと共に一匹の牝鹿を追ひ來り、森の洞窟の中に暮らしてゐるゲノフェーフアとその子シュメルツェンライヒと共に、ゆくりなくも邂逅する。ジークフリートは彼の罪を、いかに彼女に謝すべきかを知らない。しかし彼は、子供と共に彼女を城に連れ歸り、長き苦難をつぐなふべき幸福を彼女に與へたいと考へる。現世の幸福はかしもはや、彼女の心を繋ぎ止める力をもつてゐない。彼女は自分の靈が早く神の御國に呼び返されることを祈りつゝ、ジークフリートの請に應ずるのである。(この後劇は、前劇に於けるゲノフェーフアのあまりに非道い運命を緩和せむが爲に

書かれた者であらうが、前劇と必然的な関係を持つてるとは言へない。たゞこの劇におけるはじめの情景は、いかにも *Rühread* で、「里見八犬傳」の第一巻における、富山の伏姫と牧童との場面を忍ばしめるやうな趣を持つてゐる。

四、「ゲノフェーファ」に於ける性格描寫

この劇の中心興味は、ヘッセルのこの劇に對する計畫においても述べられてゐる如く、ゴローの形姿に集注されてゐる。

ゴローは純粹な真正直な、熱情的であると共に、執拗な冥想的傾向をもつた人物である、エミール・クウの言つてゐるやうに、ヘッセルの分身である。彼は青年と大人との中間にあるが故に、「極端から極端へと」走るのである。彼が一度ゲノフェーファに對する戀に捕へられるや、彼は何うしてもそれを克服することが出来ない。「彼はもうたち戻る事も出来ない。自分ながら何うすることも出来ない内部的衝動を徹底的に遂行せしめるより外に、路がないのである。しかも彼は烈しい良心の苛責を感じて、幾度も死を決心するが、それも彼には許容されない。冷かに自己を解剖すればするほど、彼は内部の燃える思ひをうち消す事が出来ない、却つてそれに是認を與へるやうになる。かくして彼はまつしぐらに「罪から罪へ、犯罪から犯罪へと」落ち行くのである。彼の戀は肉感的である、したがつて殘虚性を帯びてゐる。彼のゲノフェーファに對する仕打は、*salustisch* の傾向を持つてるといつても宜い。「しかしゴローのゲノフェーファに對する行動は、ヘッセル自身のいふ如く、「すべてたゞ彼自身に向けられて

ゐる。恐ろしい彼の自決すら、彼に取つての興奮劑であつた。かくしてヘッセルはゴローに於ける促進的動機を、「自己自身に對する憤怒の快慾」(*Wollust des Gegensatzelbstwiltens*)と稱してゐる。

ゲノフェーファは比ひなく純なる、比ひなく優しい女性であり、利己心の影などは少しもない、身に覚えもなき苦難においてすら人をうらまぬほどの聖女である。尤もいくらか冷めて、人間味に遠いやうな趣がないでもない。しかし彼女は第一幕においては、やはり深い人間的情熱の閃きを示してゐる。たゞ彼女のこの劇における役目は餘り受動的で、動作の進展と活々した交渉を持つてゐない。彼女の存在が、彼女の比ひなき美がそれ自身、罪を惹起し彼女を不幸に陥れるのである。(この點に關しては、ケルムの「ヘッセルの悲劇」及び拙譯「ヘッセル傑作集」にある「ヘッセルの生活と藝術」に於ける、無罪過劇の項参照。)

ジークフリートは、ヘッセルも言つてゐるやうに、この劇における「最も多くの罪過をもつてゐる人物」である。何となれば彼は、彼にのみ「心靈の深みを示して呉れた」ゲノフェーファに對して、自ら彼女の罪の眞偽をも調べずして、輕々しくも死刑を行ふことを、命じたからである。しかし彼は輕率なところもあるが、自分の過誤を反省すると、直ちにひき返される人物になつてゐる。

副的人物に就いては、こゝには述べない。たゞ、狂人のクラウスはこの劇においては、「ユードイツ」の民衆場面における、雙啞のダーニエルと同じ役目を務めてゐることを、書きつけて置きたい。

五、「ゲノフェーファ」の想念

「ゲノフェーファ」の想念は、「時は満期となつた。地球といふ球が新たに淨罪されねばならぬ時が来た云々」といふドラゴの靈の言葉によつて示されてゐる。それは要するに、「聖女によつての贖罪 (Sühnung und Genugung) の基督教の想念である。」(一八四一年九月二十九日記参照)。ヘッベルはまたかう言ひ續けてゐる、「しかし人間の諸々の人物のうちに入入り込んで了つた。」即ち、詩人のこの劇に對する關心は、主として人物、殊にゴロの描寫に存してゐたのである。そして前述の基督教の想念は作意と必然的の脈絡を持つてゐないかの如く見えるのである。かくしてドラゴの靈の言葉は、讀者に取つては、いさゝか唐突の感がないでもない。ヘッベル自身がこの矛盾を痛感してゐたのである。「この戯曲においては、その想念が誤謬である。」お、ゲノフェーファよ、お前は私を非常に憐れませる。私はお前を愛する譯に行かない。しかも私はお前を絶滅せしめることも出来ない。」

彼はむしろゴロの行動それ自身の裡に、この作の想念を具現すべきであつたし、かつそれは詩人の意識的構想を裏切つて、却つて力強く現はされてゐる。「十九世紀の獨逸戯曲」の著者キツトコウスキイはかう言つてゐる、『全戯曲(ゲノフェーファ)は、ヘッベルの世界觀を「ユードイット」と同様の力を以て、かつそれよりもより深き基礎確定を以て啓示してゐる。一切の出來事はたゞ吾人の眼に對してだけ善であり、悪である。一切は實は、神の裡に依存するところの世界意志から、發生するのである。而して詩人の任務は、この意志を無意識的にかつ隱微に表現してゐるところの生活の背後において、その意志が明かに認め得られることを、藝術品において啓示するに存する。これをなし得る爲には詩人

は、深く人格の奥底に潜入しなければならぬ——萬象の永久的關聯の礎地に存據するところの、その人格の行動の最初の根柢を發見せむがために。この點においてゲノフェーファは、あらゆるその戯曲上の弱點にも拘はらず、非常に重要な作品である。』

更に二次的問題ではあるが、この劇のゲノフェーファの形姿において、吾人は「女性」に對するヘッベルの理想を認めることが出來よう。當時の少壯獨逸派によつて喧傳されたる「婦人解放」は、保守的なヘッベルに取つては一つのショックであつたらしい。かくして彼は「ユードイット」に於いて、彼の理想の女性の「消極」を示したやうに、ゲノフェーファにおいてはその「積極」を描いたのである。女性に對する見解においてヘッベルは、ストリンデルクと傾向を同じうしてゐることを、書き添へて置きたい。

六、「ゲノフェーファ」に對する批評

これまで述べたところで分かるやうに、「ゲノフェーファ」は、戯曲としては、殊に脚本としては、幾多の弱點もしくは難點を持つてゐる。即ち、動作の發展の點において、同作は多くの評家の攻撃を免れることが出來なかつたのである。ヘッベルに對してとすれば非難の眼を向けるアルトハウプトは言ふ迄もなく、エミール・クワヤエルネルの如き、ヘッベルに對して最も深い理解と同情とを持つてる評家すら、その點を無視することは出來なかつた。

第一幕——それだけ取つて見れば、世界文學の珠玉ともいふべき第一幕において、作者は急激に、

全篇の動作の主要なる契機を現示した。かくして第三幕において、動作はその最高點に達するが、それ以後においては、主要動作は一向に發展しない。戯曲的生命は言はゞ抑壓されて了つた形である。つまりこの作には性格の必然的發動が動作となり、性格と性格との葛藤が動作として閃發するやうな趣が乏しい。それは主として、この戯曲がゴロの一人舞臺であつて、それに對するゲノフェーファは、全く受動的の地位を保つてゐる點からして生ずるのである。この點はしかし、謂はゆる無罪過劇の「アヒルスの踵」である。

マルガレーテはゴロを大いなる罪にまで誘惑するが、二人の關係は外部的であり、偶然的であつて、そこに内面性必然性がない。(この點においてはマラー・ミュラアの「ゴロとゲノフェーファ」の冤女マテイルデ——彼女はゴロの秘密の母である——の誘惑の方が、人間的に理解されうるといふ事である。)とにかくこの戯曲は全體として對話の場面——メスツレニーの調査に従へば、全五幕のうちで動作の場面は十二であり、對話の場面は十八である——が多く、老猶太人の場面、ゲノフェーファが死に連れられて行く場面の如き、戯曲的な場面を持つてゐながら、全體の動作は活々として脈打つてゐない憾みがある。つまりこの作には叙事詩的要素が勝ち過ぎてゐる。ゴロにしても、彼は「絶間なき話手」(der ewige Erzähler)である。彼はしばしば長き獨白をやり、對話に際しても絶えず獨白を使つて、自分の話してゐる事と反對の心持を暗示しようとするのである。尤もこの獨白や傍白に、即ちこの作を非戯曲的たらしめてゐる要素にまた、この作の獨異なる美點も存するのである。缺陷と

美點とが、言はゞ緊密に喰ひ合つてゐるのである。

かくの如き弱點は、ヘッペルの第一期——ブルツェルは第一期を哲學的時代、第二期を経験的時代と言つてゐる(「ヘッペル問題」)——の作には免るべからざる者で、この作は詩人の瞑想的傾向によつて、尤も多く惱まされてゐるやうに見える。ヘッペル自身もこの作には断ち難き愛着を持ちながら、常に一種の不滿を感じてゐた。ゲータは「青年時代において人々はその全力を不必要に浪費する」と言つてゐるが、この言葉を引用して、ヘッペルはかう言つてゐる。「このゲノフェーファは、火薬が、それが存在してゐたといふだけの理由で、發射されたやうな作品である。……その主要なる缺陷は、私があまりに早くこの大作に着手したといふ事であつた。この作は精神の最高の成熟を要求する。そして私は當時なほ、私の心情に對して餘りに多くのなさればならぬことを、持つてゐたのである。」(一八五八年六月十四日の、デインゲルシュテットに宛てた書翰參照。)

かかる缺陷があるにも拘はらず、この作は、詩人の世界觀の活々とした具現として、ゴロの内部生活の爬羅揚扶に於いて、更に詩人の血醒き人間的記録として、ゲノフェーファ傳説を取扱へる戯曲のうちで最も優れたる者であるばかりでなく、ヘッペルの作物の中にあつても、獨異な重要な地位を占むべき者と考へられる。ゴロの心理描寫は、青年として不自然な點をもつてるとか、その心理的發展に飛躍的な所があるといふ非難は別々として、力と血と火山的情熱の漲り渡つてゐる點において、深刻なる反省と冷酷なる自己批判とを持つてゐる點において、その冷熱の不可思議なる交錯において、

近代文學に於いてすら、その匹嚆を見出し得ない。彼の瞑想は、ドストエウスキの謂はゆる情熱的思想の好典型である。予は敢ていふ、ヘッセルはゴロの内面描寫の凄愴酷烈なる點において、近代文學の先端ともいふべきストリンドベルクに對してすら、あるハンデイキップを保留してゐると。

「ゲノフェーファ」の詩語は、文學史家マイエルの言つてゐるやうに、往々にして誇張と没趣味とに墮した點をもつてゐるが、全體としては、ヘッセルのその後の洗練された韻文劇においても見出されぬほどの、旋律的な詩である。而もそれは單なる流暢さではなく、力強さと個性的刻印とを具へてゐる。叙情詩人ヘッセルはこの作において、その奔放たる才能を遺憾なく發揮してゐるのである。

七、「ゲノフェーファ」の上演

「ゲノフェーファ」は、一八五四年一月二十日、維也納の宮廷劇場で始めて上演された——勿論非常に短縮された形に於いて。それは可なりの喝采を見出したといふ事であるが、しかしそれに對する觀客の興味は、永續的のものではなかつたらしい。一八五八年において同作がグイマールにおいて、デインゲルシュテットの指導の下に演じられた時も、前と同様の有様であつた。

とにかく「ゲノフェーファ」は舞臺脚本としては、可なりの難物である。それを上演して成功を博さうとするには、それは極めて巧妙なる手際よき改作を必要とするであらう。

大正十三年九月九日印 刷
大正十三年九月十三日第一刷發行

ゲノフェーファ 劇作
定價一圓八十錢

版權
所有



吹田順助	發行者	東京市神田區南神保町拾六番地
岩波茂雄	印刷者	東京市牛込區根町七番地
本間三郎		

日清印刷株式會社

發行所

東京市神田區南
神保町十六番地

岩波書店

電話四谷二九七三番
振替口座東京二六二四〇番

茅野蕭々譯 ストリント全集	和辻哲郎譯 ストリント全集	小宮豐隆譯 ストリント全集	林達夫譯 ストリント全集	小宮豐隆譯 ストリント全集	茅野蕭々譯 ストリント全集	大庭米治譯 ストリント全集	野村行一譯 ストリント全集	野村行一譯 ストリント全集
ダマスクスへ	或る魂の發展	下女子	痴人の告白	自然主義的戯曲	賢者ナータン	ミスサラサムプソン	エミーリアガロツテイ	
定價二圓三十錢 送料書留十八錢	定價二圓三十錢 送料書留十八錢	定價二圓七十錢 送料書留廿五錢	定價二圓五十錢 送料書留十八錢	定價二圓 送料書留一圓八錢	定價二圓二十錢 送料書留十七錢	定價一圓三十錢 送料書留十七錢	定價一圓三十錢 送料書留十七錢	
岩波書店								

終